
The Defense Network

KYOS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Defense Network

【Nコード】

N0408T

【作者名】

KYOS

【あらすじ】

技術立国日本

しかし、IT技術に関しては世界の最先端には届いていなかったこの状況を打破すべく政府は特別専門学校を作った

そこに通う5人の少年少女がハッカーやウイルスと戦う、コメディありミステリーありの青春ストーリー

code 0000 (前書き)

この物語の世界背景なので短めです
ではごいじぞ

code 000:

技術立国日本

現在の日本には高速ブロードバンドが普及しIT技術は現在の生活から切っても切り離せないものとなった

その反面サイバーテロと呼ばれるIT技術を悪用した犯罪も起こっている

年を追うごとに悪質さを増していくサイバー犯罪

技術が発展すればするほどより巧妙さを増していく

だがそれらに対抗するノウハウは日本国内の企業はほとんど持っていないかった

それもそのはず、コンピュータが生まれたのはアメリカだ、歴史が違いすぎる

そのため、ほとんどの場合海外の会社に頼らざるを得なかったのだ
この現状を重く見た日本政府は国内のIT産業の成長のため、数多くの政策を打ち立てる

IT産業の奨励のための助成金

有用と思われる特許の積極認可

そんな数々の政策のひとつで、将来の有望なITの専門家を育成するための国策の特別専門高校があった

その名は富士城学園

code 000 : (後書き)

次回から主人公が出てきます

code 001 : 04/07 (前書き)

今回から主人公が出てきます

ピピピッ、ピピピッ、ピピピッ

「んっ・・・」

電子音が聞こえる

けど、いつも聞いている方向からじゃない
何でだろ…

とりあえずうつとうしい電子音を止めるために音の方向へ腕を伸ばす
…けどその腕が宙をさまよう

ブンツブンツブンツ

いくら腕を振っても手ごたえがない

仕方ない、まだまどろんでいたいとこだけど起きるか

鉛のように重たい体を起こす

あれ？机で寝てたんだ、俺

そっか、『あのプログラム』を始業式までに完成させるために最近
徹夜してたからな…

などと考えつつ背筋を伸ばす

バキツとどこかの関節が鳴った

ピピピッピピピッピッ…バンツ！

さつきからつるさい目覚ましを平手一発で止めてクローゼットに向
かい制服に着替える

そのまま部屋を出た

まだ朝早いせいか少し肌寒い

学食へ向かいそこでみんなより少し早い朝食をとる

食べ終わるころになると生徒が増えてきた

しばらくのんびりと食べていると悪友が近づいてくるのが見えた

「おはよ〜我が親友」

「お前にしては早いな、我が悪友」

「そりゃそうだろ、今日は専門課程の始業式なんだからな」

そついやそうだったな

国がIT大国を目指すために立てた数々の政策の一つがこの国策学校だ

普通の高校と違って、高校と専門学校が合体したようなシステムになっている

最初の3年間は高校の課程とコンピュータの基礎知識をみっちり叩き込まれる

4年目からは各自が決めた専門課程へと進みその分野を専門的に勉強する

専門課程にはいくつかあつて情報セキュリティ、WEBデザイナー、ITシステム、ITビジネス、ネットワーク技術、計算システムなどあといくつか専門課がある

専門課にあがるにはテストがあつてそれに合格しなければその課にはあがれない

ちなみに人気があるのはITシステム、次が情報セキュリティだ
俺達は今年で4年生

ちよつと専門課程にあがる年だ

俺は情報セキュリティ、目の前にいる悪友はITシステムにあがる

code 002 : (前書き)

すみません、不定期更新です

話作りに苦労しています

パソコンの技術に関しては多少の知識があるんですが・・・

とりあえず青春ほのぼの

たまにシリアスでがんばります！

感想、誤字脱字、説明が分からない！！等のご指摘等ございましたらお願いします！

code 002:

と、二人で他愛のない会話をしているうちに、いつの間にかいい時間になっていた

「そろそろ、教室行くか？」

「そうだな。じゃ、教室で」

「ああ」

お互いに部屋が少し離れているので食堂の入り口で分かれて、お互いに荷物をとりに戻る
部屋に入り中に何も入っていないかばんを持って教室へと向かった

/ /

「おっす」

「遅いぞ、結弦」

「お前が早すぎるだけだろ。いつもは遅刻ぎりぎりの癖に」

いつもならチャイムぎりぎりか大幅な遅刻をして入ってくる金髪の男、神池が机にいる

その横には赤が少し入ったストレートの長髪に緑のカチューシャをつけた少女、北園もいた

「だって今日は専門課程の初日だぜ？」

「結弦はどこだっけ？」

「情報セキュリティ」

「そついや皆専門ばらばらだったわよね？」

「そついやそつだな」

話しながら自分の机に座る

するとちょうど教室の入り口から入ってくる人影が見えた

「おはよう。みんな」

「おう、やっと来たか仲村」

「あれ？神池君なんているの？」

「なんで？とは失礼な」

「やっぱ皆同じ反応するわね」

神池の反応にすかさず北園が突っ込みを入れる

このおっとりした少女は仲村

俺とは幼馴染だ

普段はこんな調子だがネットでは世界的に有名なハッカーだったりする

こいつも俺と同じ情報セキュリティにあがる

ちなみに神北は通信ネットワーク、北園は計算システムだ

「お、もう皆そろってんのか」

さつき食堂にいた俺の悪友こと竜崎が教室に入ってくる

そのまま5人で談笑していると、程なくして教師が教室に入りチャイムが鳴る

//

S H Rが終わると教室が一気に騒がしくなる
みんなそれぞれの教室に行くためだ

「そんじゃ、また昼休みな」

「おう」

「行くぞ仲村」

「う、うん」

そのまま仲村と情報セキュリティの専門教室に行く廊下で

「ねえ？」

「ん？なんだ？」

「授業、大丈夫かな？」

仲村が不安げな顔で聞いてくる

たぶん授業についていけるか不安なんだろう

「大丈夫だろ。お前それ専門だし」

「全然だよ」

「いや。絶対大丈夫」

「そ…：そうかな？」

「俺が保障する」

顔を赤らめてうつむいてしまった
か、かわいい…

「ん？ どうしたの？」

「い、いや。なんでもない」

ついつい見とれてしまう

一応こいつとは幼馴染だけど最近妙に意識してしまう

まあ、それはいいとして

こいつが情報セキュリティをやっているのは確実だ

だって、ハッカーってことはセキュリティの専門家でもある

泥棒は泥棒の手口をよく知っているのと同じ

相手を攻撃する手口を知っているならそれを防ぐやり方もよく知っている

code 002: (後書き)

ちよつと小ネタ

この小説の区切りに「／／・・・」が使われているのはご存知だと思います

これの「／／」はC言語というプログラム言語でのコメント表記です
「コメント」というのはプログラムの中でコードがどんな処理をしているのか、メモを残すときに使います

プログラムの規模が大きくなると、どこでどんな処理が行われてくるかわからなくなりますので、これを有効に使うことで後で見やすくなります

code 003 : (前書き)

とりあえず週1更新で頑張ろうと思います

また、気まぐれで突発的に更新するかもしれません

ご意見、ご感想いつでも待ってます!!!

code 003:

それに仲村は結構まじめで、成績はむちゃくちゃいい
普通に勉強していればダブることはないだろう
そんな話をしていると、いつの間にか教室に着いていた俺たち

「なんだ、これ」

「さ、さあ？」

思わず入り口で入って固まってしまった

情報セキュリティーの指定された集合場所に着いてみると、そこは、
巨大な鉄の箱が幾重にも並べられた空間だった

小さい動作部の音が重なりあい轟音を立てている

そこから発せられる熱を冷ますために寒いくらい冷房が効いている

「何だこれ？」

もう一度同じ事をつぶやいて啞然とする俺

「さ、寒い…」

寒そうに縮こまる仲村

入り口に立っていたいたら邪魔になるので部屋の隅に寄ってちょっと待
ってみる

情報セキュリティーの生徒らしい人たちが入ってくる

「やっぱ、ここで良いんだよな？」

「うん…」

とりあえず生徒のあとを付いて行ってみる

「うわっ」

「すっ…」

二人で驚きの声をあげる

そこにあっただのはずらっと並んだパソコンのモニター画面だった
机が格子状に並んでざっと100台はある

「さすが国立だけあって最新設備なんだな」

「お金のかけ方が違うね…」

そう二人でぼやきながらそれぞれの机へと向かった

「私が君達のクラスを受け持つこととなった、水谷静恵です。これからよろしくね」

専門科目の授業はこの冷房がきついスパコン部屋で始まった

正直、気温とのギャップがハンパない

仲村も若干震えているように見える

しかし、先生はカーディガンを着て防寒対策をしている

……今度上着をここに持つてくるか

そんなことを思いつつ先生の話聞く

「最初はこの部屋で授業をしますので寒さ対策は個人でしてください。

毎年上着も着ずに頑張っている生徒が若干名いるけどほぼ100%の確率でダウンしてるからそのへんは気をつけてね。」

防寒対策が必須の座学ってなんですか!?

たぶんそう思ったのは俺だけじゃないだろう

「でも大丈夫、この人数をまとめて授業するにはこの部屋しかないから1学期はずっとここだけど、2学期からはグループに分かれて別の部屋で授業します。」

教室から安堵の溜息がもれたのは気のせいじゃないだろう

「何か質問ある人?」

シーンとして誰も手を上げない

「それじゃあ、最初だからこの施設を説明してまわるわね。皆私についてきて。」

そう言って先生が教室を出る

それを追うように、みんな椅子から立ち上がり仲村と二人で行列の最後尾をついていく

code 003 : (後書き)

ちよつとマメ知識

皆さんパソコンを付けていると本体が熱くなるのはご存知ですよ？

これはパソコンが動くときに流れている電流の一部が熱エネルギーになって放出されているからなんです

スパコンも一緒なのですが数が多い上に密集して設置されていますそのため熱が籠りやすく高温になりやすいので、熱暴走を引き起こしやすくなります

そのような状態にさせないためにスパコンを置いてある部屋の空調を強くしているのです

入ったら上着を着ないと、きつと風邪を引いてしまいますね

code 004 : (前書き)

一応メインヒロインのはずの仲村が出てきませんね
ハッキングの話で出す予定ですが、しばらくそんな予定ないし・・・
とりあえず近いうちに出すように努力してみます

code 004:

水谷先生の後について、来た道に戻る

その道の途中が十字路になっていた

来的时候は入り口からまっすぐに入ってきた

先生は入り口に向かって右に曲がる

歩きながらサーバーを見るとたくさんの、サーバーの稼動状況を示すLEDが点滅している

そしてそれがずっと続いている

どれだけの規模なんだ？

と、思っていると先生の解説が聞こえた

「ここにあるスーパーコンピュータ「FUJISHIRO」はCPUを4個乗せたPCを320台繋げています。

CPUの数の上ではJAMSTECが運営している「地球シミュレータ」とほとんど同じです。

能力的には「地球シミュレータ」に若干劣りますがこちららも全体としてはかなりの処理能力を持っています、

このスパコンは大規模な処理は行わず、数を生かしてローカルの仮想のネットワークを作っています。

このネットワークを使って情報セキュリティ、ネットワーク技術、計算システムが授業を行います」

なるほど、さすがに本物のネットワークで擬似とは言えウイルスを流すわけにいかない

だあらスパコンを使って架空のネットワークを作ったってことか

そのまま歩いていくと、壁に突き当たりさらに歩いていくと、急に開けた空間に出た

さっきまで俺達がいた教室と同じようにパソコンがずらっと並んで

いるがLANケーブルみたいなのがやたら転がっている

「ここがネットワーク技術の教室です。みんな、2年目・3年目になると他の課とも共同授業をするのでそのときに来るかもしれないので覚えといてくださいね」

と、聞こえたから机の方を覗き込んで神池を探してみる

あいつ頭が金髪だから分かりやすいんだよね

きよろきよろと探していると金髪の頭発見

こっちの方で金髪はあいつだけみたいだから確定だ

ちよつと眺めてみる

ちゃんと前を向いて担任の説明を聞いているように見える

珍しくあいつがまともに先生の話を聞いているらしい

いつもなら授業が始まったとたんに夢の世界に避難しているのに

神池が授業をまともに受けてるところなんてほとんど見たことないし驚きだ

と思った瞬間

あれ？

あいつの首がカクンツと落ちる

そのままうつ伏せに倒れる

どうやら先生の眠り魔法に負けたらしい

なんか、向こうから鬼教官みたいな人が物凄いオーラを出して近づいているけど起きる気配なし

俺、知らね〜と

次の場所に向かう俺の背後から小さな悲鳴が聞こえた気がしたが、気のせいということでしたと先を急ぐ俺だった

code 004 : (後書き)

ちよつとマメ知識

地球シミュレータとは海洋研究開発機構 (JAMSTEC) 横

浜研究所に設置されているスーパーコンピュータのことです

2002年に運用を開始し約2年間計算性能世界一を守っていましたがこのコンピュータはその名のとおり地球規模の現象のシミュレーションを行っています

たとえば地球温暖化の影響とか地殻変動とか・・・

ちなみに作者が高校の修学旅行で見学に行ったときはなにやら工事をしていました

コンピュータの世界は1年、2年で時代遅れになる世界ですから性能向上でもやってたんですかね？

code 005 : (前書き)

いや〜話が思いつきません(汗)

とりあえず身近にあるものをネタに色々やってるんで多少おかしな

表現があるかもしれません

その場合はご指摘ください

感想、お待ちください

code 005:

先生について、今度はネットワーク技術の教室とは反対の分かれ道を歩いてた

と言っても歩いていく道の光景はまったく変わらず、LEDがただ点滅しているだけ

その先の教室もまた同様

ただ、こっちはむき出しの基盤が多く転がっていた

「こっちの教室が計算システムの教室です。みんな、覚えといてくださいね」

そんな先生の説明を右から左に受け流しながら今度は北園を探すおっ、いたいた

比較的後ろの席だったからすぐ見つかった

カチューシャ分かりやすいし

さすがに神北じゃあるまいしまじめに先生の話を聞いているようだつまんね〜

とつぶやいた瞬間

ッ!!!

何だ！？今、物凄い悪寒がしたぞ！？

まさか……！

北園の首がゆつくりとこちらを向く

うわぁ……目が光ってる

あいつ地獄耳だな

「はい、じゃあ次行きますよ〜」

先生に促されて絶対零度の視線からそそくさと逃げだす俺だった

/ /

「竜崎！そつち行ったぞ！」

「おう！まかせろ。うおりゃああ！」

雄たけびとともにゲーム機のボタンを高速で連打する

ゲームに熱中する馬鹿がここに二人

ちなみに今は昼過ぎ、場所は俺達の指定席でゲームをしていた

ここは教室棟の倉庫なのだが普通なら電子認証で、先生のパスワード

ドがなければ入れない

だけどそこはやっぱり情報セキュリティー

パスワードを破って進入したのだ

ちなみにそのソフトを作ったのは仲村だけ

それでかれこれ2時間はこうしている

普通なら今頃は授業をしている時間だ

しかし今日は始業式だった為半日授業で、午前中の施設見学だけで

半日潰れて、午後からは何もなかった

それで最近の俺達のマイブームで狩猟ゲームをしていたのだ

「いよつしやああ！！巨大種倒したぜえ！！！」

「ナイス！竜崎！これで俺の装備が完成だっ！！！！！」

二人しかいない倉庫で馬鹿二人が雄たけびを上げていた

「…………ふう。そろそろ戻るか？」

「ああ、そうだな」

一区切りついた俺達はこっそりと倉庫を抜け出る
そうして特にあてもなく廊下を歩きながら二人で雑談をしながら歩
いていると

「そっいや結弦、一つ頼まれてくれないか？」

と、唐突に依頼をされる

昨日も同じような状況があったような
だから俺は、

「嫌だ」

2文字で返してやった

「頼む！結弦！！」

うわ・・・土下座しだした
いきなり最後の手段を使うか
とりあえず無視を決め込もう
そのまま歩き去る

「頼む！結弦様〜っ！」

なんだか足が重い

歩きながらチラッと後ろを覗き見る

そこには俺の足にしがみついてひこずられている竜崎が見えた
怖っ！！

俺はその光景に恐怖してしまった

code 005 : (後書き)

ちよつとブレイク

去年からスマートフォンが普及してきました

代表的なのはAppleが発売しているiPhoneとGoogleが提供している「Android」を搭載したスマートフォンでしょうか？

これを読んで下さっている中にもアプリを作りたいと思っている方はいるんじゃないでしょうか？

そんな方には、個人的にはですがAndroidアプリがお勧めです理由は開発環境を整えるのが簡単だからです

iPhoneのアプリ開発環境はAppleにユーザ登録をして・・・と、手続きが色々あって大変そうな感じがしました。(間違つてたらすみません)

その点Androidアプリは開発環境をダウンロードしてインストールして設定を変えるだけで済みます。

また、開発方法も自分ではありますが、色々と雑誌などにも載っていて情報が得やすいように感じられました。

これを読んでの方がアプリを作つて有名になつたら光栄ですし、ぜひ挑戦してみてください。

code 006 : (前書き)

章管理ってどうするんですかね？

もつちよっと話が進んだら整理をしようと考えている今日この頃です

code 006:

「分かった。分かったからその格好のまま付いてくるのは止めてくれ」

周囲から冷ややかな目で見られて、視線が痛すぎる…
たく、めんどくさいのにな

「その代わり貸し一つな」

「よっしゃ！！さすが我が親友！！頼りになるっ！それで頼まれた内容なだけどさ…」

「ちよっ、待て！！覚え切れん！ここで話すな！」

地面に這いつくばって土下座していたのが即座に復活したかと思うと、いきなり頼まれた内容をべらべらとしゃべりだす
何だこの切り替えの速さは

「とりあえず俺の部屋に行くぞ。そこで聞かせる」

「おう、そうだな！頼むぜ、我が親友！！」

竜崎をそう促し自室に向かった

/ /

とりあえず内容を把握したかったから、一番落ち着ける自分の部屋に来た

「相変わらずお前の部屋はすごいことになってんのな・・・」
「うるせえ」

俺はもう慣れたけど他人が見たら異様な光景だろう

何せ大型のデスクトップパソコンが5台まとまって本棚に収まっている

そこから伸びるケーブルが机にある10台のディスプレイにつながっている

そこには色々なサイトが開いていたり黒い画面に白い文字が流れている

はつきり言って学生寮の現役生徒の部屋にあるような物ではないと自分では思っている

だけどこのPCでやってることといえば、ほとんどアフィリエイトで広告費を稼いでるだけだ

もともと、この広告費が俺の生活費だったりする

両親がいない俺は親戚に引き取られたが、その親戚とはうまくやれず半ば家を飛び出るように全寮制のこの学校に来たのだ

なんとか学費だけは払ってもらってたけど仕送りなんて一切なし

バイトもしてなかったから貯金もほとんどなかった

とりあえず最初は仲村にも協力してもらってアフィリエイトのサイトを作ってもらったりして少しずつ稼いでいた

そこから少しずつ貯めた貯金で規模を大きくしていったらこの状況そんな訳で必然的にこんな部屋になるのだよ！ハッハッハッ！

と、誰に対する言い訳なのか分からない呟きを心の中で叫んでいた俺だった

「それで、どんな内容なんだ？」

机の椅子に腰掛けながら聞く

「聞いた限りじゃどうやらウイルスにかかったらしい」

「ウイルス？」

「そ、ウイルス。駆除して欲しいって」

「なんで俺？そんなの市販のウイルス駆除ソフトを使えば良いじゃん」

「え〜っと…」

俺のベッドの上で仰向けになりながら竜崎は考えている

自分が頼まれたくせに内容覚えてないのかよ…

しばらく黙り込む竜崎

「あっ！思い出した！」

と声を上げながら起き上がる

「なんか新種のウイルスらしい」

「新種？」

また、なんかめんどくさいこと言ってるな〜

「ああ、なんかいつの間アイコンが変わってるからウイルスだと思っ
て市販の駆除ソフトを使ったらいいんだ。」

「ただどいくらソフトで検索をかけても出てこないって。もしかしたら、
まだ見つかってないウイルスかもしれないから、手に負えないからヨロシク！と、
言っていた」

「めんどくさ……。とりあえず長々と説明ご苦労様です」

「いえいえとんでもない」

なんだこのやり取り…

それより新種のウイルスを探すのってめんどくさいんだからな
まず不審な動作を探してどんなウイルスに似ているか調べてみる
すでに存在しているウイルスの亜種なら元になったウイルスの特徴
を探って、それに似たファイルや隠れ場所を検索にかけてやる
引っ掛つたら特徴を見てワクチンを作る

ワクチンがないとまた同じウイルスに感染したときに困る
もし完璧に新種なら怪しい動きをしているプログラムを監視したり、
見に覚えのないファイルを探さないといけない
何にしる新種だとやること多いし面倒なんだよね

ちなみにこれは俺流のやり方
駆除ソフト出してる会社がどうやって情報を集めてるのは、調べ
たことないから俺も知らない

「まあ、何でもいいや。詳しく見たいからそいつの所に連れてけ」
「おう、じゃ行くか」

二人して立ち上がり竜崎は先に部屋を出る
俺はオリジナルOSが入ったUSBを持ち部屋を出て、先に行った
竜崎の後を追った

code 006 : (後書き)

ちよつと小ネタ

皆さんWindowsの更新、していますか？

たまに右下に「更新ファイルがあります」とか表示されるあれです
ウイルス対策ソフトを入れていると思いますがそれだけでは安心で
きません

更新ファイルは対策ソフトが防げないような「穴」を塞ぐために適
用されます

皆さん、定期的に更新ファイルを適用するように気をつけましょ
う！

code 007 : (前書き)

最近仕事が忙しくなっ
た
なんでだろ？

とりあえず暇を見つけては書くよつにがんばります！
感想お待ちしております

code 007:

「連れてきたぜ」

「おじゃまします」

竜崎に連れられて、その依頼主の部屋にたどりつく

「それじゃあよろしく頼むよ」

「了解」

早速作業に取り掛かる

USBメモリーを彼のPCに挿して電源を立ち上げる

最初に起動したBIOSの設定をUSB起動に書き換えて再起動

今度はオリジナルOS「Swallow」が立ち上げる

さてと…どうすっかな

腕を頭に組んで、なにかから取り掛かるか考える

「あつあの…」

「んっ…?」

「パソコンを起動したらウイルスが動くんじゃ?」

「ああ、そんなことか。大丈夫心配ない」

適当にあしらって作業を続ける

実際ウイルスの心配はまずない

コンピュータウイルスといっても所詮プログラムだ

それに大概のウイルスは「Windows」上で動くようにできている

そして俺の「Swallow」はLinuxディストリビューションだ

OSが違つたためWindowsで動くウイルスはLinuxでは動かない

近年のウイルスの騒動はWindowsが広く普及しているために影響が多いため騒がれている

とりあえず頭を整理し作業を開始する

俺特製の検索ソフトを立ち上げる

検索条件に最近更新されたファイルと名前が書き換わつたファイルを加える

実行するとものの数秒で結果が出てきた

結果の一覧をスクロールさせながら怪しいファイルにめぼしをつける
そうして絞り込んで一つのファイルを隔離する

「『Flu?』」

「『インフルエンザ』という意味だ」

俺の呟きに竜崎が答える

「どうかいつの間にも後ろに立ってた？」

「まあ、それは置いといて」

「インフルエンザか」

「また言いえて妙な名前付けたなこの作者は
とりあえずさつさと削除するか」

「そう思い削除のボタンを押そうとしたとき」

「っ!!」

画面の中央に大きなビックリマークが出現した

急に表れてびっくりしたが、これは俺のOSに入っているウイルス
対策ソフトがウイルスを見つけたときの表示だ

Linuxウイルスは数が少なく珍しいから興味本位で捕まえて、
ファイル名を見てみると

「『Flu』…って、まさか…っ!」

思わず大声を上げてしまった

さっき捕まえたウイルスファイルの名前をもう一度見てみる

…やっぱり同じだ

たまたま同じウイルスが引っ掛ったのか？

いや、そんな確立は天文学的数値だ

ということとは…

「WindowsのウイルスがLinuxに感染した…」

「どうした、結弦」

俺のつぶやきに竜崎が怪訝な顔をして聞いてくる

code 007 : (後書き)

ちよつと小ネタ

皆さん、「Linux」って知ってますか？

見た目的にはMacOSに似ていると思います。たぶん昔の(汗)Linuxというのは1991年に大学生が作ってネットに公開したOSなのですが、無料でソースコードを手に入れることができるので、様々な人が改良して様々なOSを作り上げています

サーバーや携帯電話にも使われていて、有名なところではAndroidもLinuxをベースにしています

皆さんも興味があったらぜひお試しください

code 008 : (前書き)

最近夜がドタバタしててなかなか更新できませんでした
質問、感想お待ちしております

code 008:

「WindowsのウイルスがLinuxベースのマシンに感染した」

もう一度、今度は竜崎にも聞こえるように言う

「あつ、そうか…」

意味を理解したようで竜崎も驚きの顔をしている
しかし、その横で頭に大量の疑問符を浮かべた依頼主
こいつ本当にこの学園の生徒なのか…？
とりあえず説明してみる

「一応言つとくが、ウイルスって言っても正体はただのプログラム
つてことは分かるよな？」

「それは、まあ…」

さすがにそれぐらいは分かるらしい
というか、分からなければこの学園じゃやってけない

「それじゃあ何でWindowsでMacOSのソフトが動かない
と思つ？」

「そりゃあ、Windowsで作ってるからじゃないんですか？」

「いや、ちよつと違うよつな…」

もういいや、さっさと説明して続きをしよう…

「ぶっちゃけると、中身が違うんだよ。構造が違うからその作り方

も違う。見た目はそっくりでも中身は別物ってわけ」

「……」

「…聞いている？」

「あ…ああ、なるほど…」

冷や汗流しながら必死に分かった振りをする依頼主

駄目だこりゃ

「とりあえずそういうわけだから windows と MacOS、両方で動くプログラムは難しいというわけだ。説明終了。作業再開！」

そう言っただけ再びパソコンに向かう

そして今度は別のソフトを立ち上げる

依頼主の PC から捕まえたウイルスを指定してソフトを実行する

このソフトはウイルスの特徴やコンパイルソフトは何か、プログラム言語は何で書かれているかなどの特徴を解析するプログラムだ

解析してその特徴をデータベース化することによってウイルスの検知率が上がりセキュリティが向上するわけだ

その解析をしながら捕まえたウイルス以外の駆除を開始する

こっちはもうはすぐに終わった

検索して見つけ次第片っ端から削除するようにしたが、ウイルスファイル自体はそんなに拡散していなかったからだ

解析のほうはまだしばらくかかりそうなので今度はセキュリティチェックをしてみる

ウイルスやボットと呼ばれるような悪質なプログラムに感染した場合、悪意を持ったものがその PC を乗っ取りやすくするために

バックドアやセキュリティソフトを破壊していることがあるからだ
ちなみにバックドアとは、攻撃者が次に乗っ取る時に簡単にできるように悪質なソフトを仕込んだり設定を変えたりすることだ

一通りチェックを終えたところに解析も終わったようで、画面に解析

結果が表示された

code 008 : (後書き)

ちよつと小ネタ

皆さんウイルス対策してますか？

ウイルスは毎日、毎時間、毎秒新種が生まれています

セキュリティソフトを最新にしていないと知らぬ間に…ということもありえますよ

ところでウイルス、ウイルス言ってますがその実態はご存知ですか？

まさかインフルエンザみたいにパソコンがウイルスに感染しませんよね？

正体はただのソフトウェアです

ExcelやWord、一太郎とかと同じプログラムの塊なのです
さて、では他のソフトとどこが違うのでしょうか？

それは、ユーザに害を与えるプログラムが書かれているか、ということ
ことです

また、ひとりでに他のパソコンに感染してしまうかというのも定義
の一つかもしれません

皆さん現実でもパソコンでもウイルスには気をつけましょう！

code 009 : (前書き)

すいません。ネタが：思いつきませんでした。
とりあえず駄文ですがどうぞ。

code 009 :

表示された結果を眺めてみる

まず、このウイルス自体はC言語で書かれたものらしい

プログラミング言語としてはかなりスタンダードなものだ

簡単に解析されたソースコードを読んでみる限り侵入の仕方はいくらでも
まずメールの添付ファイルに自身を紛れ込ませ偽装する

メールの受信者が添付ファイルを開くと、その添付ファイルが開く
が裏ではウイルスが動き出す

動き出したウイルスは、そのPCのノード名やドメイン・IPアドレスなどの情報を収集して、おそらくこのウイルスの作成者が用意したであろうサーバにデータを送信する

その後PCのネットとの入り口とも言えるポートをすべて開放する
ポートは普段、特別な設定をしない限り必要なポートを除いて閉じているはずだ

その理由は開いていると他のウイルスやクラッカーなどがこのPCに侵入しやすくなるからだ

家に入るすべての入り口を開けっ放しにしているようなものだ

このように次に攻撃するときに簡単に乗っ取れるようにすることをバックドアという

これだけ見る限りこのウイルスはクラッカーがどこかに攻撃をする際に操るために仕掛けたものというのが分かる

こいつは危うくどこかのクラッキング攻撃の加害者にされるとこだったのだ

それをずっと眺めていて最後に解析不能な部分があった

他のどんな言語でもないから復元できないらしい

おそらくここにWindowsとLinux両方で動ける秘密があるのだろう

興味があったからそのデータをUSBに保存しておく

ウイルス自体にデータの破壊とか目だった機能はなかったからこれで終了だ

「とりあえずこれで大丈夫だろ。あとは色々セキュリティのアップデートやら何やらやってくれ」

「ありがとうございます！ やっぱ情報セキュリティの人は詳しいんですね」

「…俺はお前の知識のなさに驚いたが」

「何か言いました？」

「いや、なんでもない。竜崎帰るぞ」

「おう」

そう言っつてパソコンからUSBを引っこ抜き部屋を出る

廊下を歩きながらこのウイルスの出所を調べてみようかと考えていると竜崎が何気なく聞いてきた

「あのウイルス、何なんだ？」

「俺に聞くな。俺だってどんな仕組みだか分からないし。それに変なプログラムを使ってたからな」

「変な？」

頭に疑問符をつけながら竜崎が聞き返す

code 009 : (後書き)

ちよつと小ネタ

1年か2年位前に「ブラッディ・マンデイ」というドラマをしていたのをご存知でしょうか？

そのドラマで主人公がUSBからOSを起動していました

あれはLinuxを改造して作っていました

ネットのニュースを眺めていたら「Windows8」でもそんな

ことができるみたいなのが書いてありました

もしできるなら面白そうですね

また何か情報が出てきたら書きたいと思います

code 010 : (前書き)

すいません、遅れました
では、どうぞ！

code 010:

「たぶんあれは自作のプログラム言語だと思う。あとで仲村に検索かけてもらわないとほんととも言えないけどな」

「それじゃ肝心なところの仕組みが分からないんじゃないのか？」

「そうなんだよ……」

世の中には色々なものを作る趣味の奴もいてプログラム言語を作る人間中にはいる

当たり前だけどそのオリジナル言語の解説書なんて出回ってないだから一応ネットで検索かけて見てその言語の作者が解説や仕様を公開してないか調べる

でも大概公開してないから自分の知識と勘を使わないと解読できないめんどくさいことこの上ない……

「ところで報酬は？」

「あるわけないだろう」

「ただ働かさせるな」

俺だってやりたいことは色々あるんだから

「いいじゃん、たまには」

…さっきので今月18回目なんです

「まあ、いいや。俺は部屋に戻る」

これ以上こいつに付き合ってたら余計な仕事を増やされる

「ああ、また頼むな」

二度とごめんだっ！！！

そう心の中で叫びながら竜崎と別れた

そのまま寮に帰ろうと渡り廊下を歩いていると中庭のベンチに見慣れた後ろ頭を見つける

仲村だ

ちよつと脅かしてやろうと音を立てないように気につけながら近づいていった

／／

遠くで運動部が部活をやっている声が聞こえる

だけどここの辺は校舎が密集しているせいか、時折風が木々を揺らし葉を鳴らす音が聞こえるぐらいだ

そんなのどかな昼下がりのベンチで私は最近お気に入りの小説を読んでいた

今日は始業式だけだから昼過ぎには授業が終わり午後は暇になる

だから結弦にサーバの組み方を教えてもらおうと机のそばにいったけど、残念ながらもうどこかへ行つた後だった

まあ、どこに行ったかはあらかた予想できるけど

仕方なく私はやることを探して校舎をさまよって、この気持ちよさそうなベンチにたどり着いた

カバンの中には最近お気に入りの本があったから読書していたというわけ

ただどここ、本当に気持ちいい

春だからというのもあるけど気温は暑すぎず、かといって寒すぎず

太陽もちょうどいいぐらいの強さ

時折ふく春風が肌に心地いい

正直さつきから本を読みながらうとうととしていた

その時

コンッ！

私の頭が小気味いい音を立てた

あまり痛くはなかったけど、気持ちいい昼のひと時を邪魔されて少し不機嫌になり、ちよっと睨みながら後ろを振り向く

そこには分厚そうな専門書を片手に笑ってる結弦が居た

code 011: (前書き)

今回は間に合いました(汗)
ではさっさと

「せっかく気持ちよくうたた寝してたのに…」

と、私はぶつぶつぶやきながら体を後ろに向ける

結弦の笑顔に私も笑顔で返して、こぶしを握り

ゴスツ!

「じほおっ!?!」

結弦のみぞおちに正確なボディーパーを決めてやった

その場に崩れ落ちてうずくまる結弦

だけど私は何事もなかったように読書に戻るのだった

「ちょっとまってえ!! 無視か!!!」

どうやらスルーしたことが気に入らなかったらしい

「だって結弦が悪いんじゃない。気持ちのいい午後のお昼寝を邪魔したのはそっちでしょ?」

「だからって正確無比なボディーパーを決めておいて無視はないだろう!? 危うく意識が飛びかけたぞ!」

「もういいじゃない。無事なんだし」

と、結弦に用事があるのを思い出す

「そういえば結弦、教えて欲しいことがあるんだけど」

「今の話はなかったことになってます?」

「もちろん」

結弦がハア、とため息をつきながら頭を抱え込む
諦めたみたいだ

「で、何だよ？ 教えて欲しいことって」

「サーバの組み方教えて欲しいの」

「なんでまた？ というか知らなかったのか？」

「うん」

また頭を抱え込んだ

「ホントにお前ってプログラムのこと意外は駄目なんだな」

「だって結弦が全部やってくれるから。覚える必要ないじゃん？」

「しょうがないな… って俺も調べて欲しいことがあったんだ」

「なに？」

「これ」

そう言っただけで結弦がポケットから取り出したのはUSBメモリーだ
だけどUSBメモリーだけ見せられても分からない

「その中に何が入ってるの？」

「新種のウイルス」

なんでまた？ そんなもの調べてなんて今まで言われたことないし
考えが顔に浮かんでいたのか説明し始めた

「さっきまで竜崎のただ働きに付き合わされてウイルスの駆除して
たんだ」

昔っから結弦はよく竜崎が持ち込んだ厄介ごとに巻き込まれてた

だからこれもその類だろう

「そのときにSwallowつなげて駆除したんだけどいきなりアラーム出てきて」

「まさか…」

「察しがいいな。Windowsに感染してたものがLinuxに感染したみたいなんだ」

話を聞いて思わず固まる

毎日欠かさず私の構築したネットワークで最新技術を集めてるけど

そんな情報を掴んだことがない

それにそんな技術、素人では作れるはずがない

「そのウイルスの発信源を調べて欲しいってこと？」

「そう。頼めるか？」

「…うん、やってみる」

どの経路から調べていくか考えながらうなづく

code 011: (後書き)

最近Androidを勉強することにしました

この前の日曜に開発書を買いちよくちよく読むようにしています
ここでも少しずつ作り方やコツを書いていこうと思います

code 012 : (前書き)

感想、批評お待ちしております！

code 012:

「それじゃあ結弦の部屋のパソコン使っていい？」

私の部屋にあるのは市販のノートパソコンと少し改造したデスクトップパソコンだけだ

対して結弦の部屋にあるパソコンは下手なサーバよりスペックがある正直ネットを動き回るならスペックの高いほうがいい

「分かった。それじゃあ今からやるか？」

「うん」

そう言って寮へと歩き出した結弦の後ろを、あわてて荷物をカバンの中にしまいついていく私だった

/ /

「やっぱりいつ見ても凄いね、ここは」

「お前も言っか」

さっきも竜崎を連れてきて同じこと言われたぞ

まあ、普通の部屋じゃないということは認めるが…

「それじゃあちょっと借りるね」

「おっ」

そう言っ て机に向かう仲村
手持ち無沙汰になつた俺はベッドに座り仲村の様子を眺めることに
した

何回か使わせたことがあるからもう慣れてるみたいで、ものの数
十秒で自分の環境を作りやがった

ホントにソフトのことになるとこいつには敵わない
作業を始めたらしく画面に様々なコンソールが出ては消え、文字が
滝のように流れていた

と、不意に片手でキーボードを打ちながら、もう一方の腕をこちら
に伸ばしてきた

「ウイルスの入ったUSB」

「ああ、忘れてた。ほらよ」

データを渡すのを忘れてた

ポケットからUSBを取り出して手のひらに載せる

それをパソコンのUSBポートに入れて数秒、画面にウイルスのデ
ータを表示した

「これのこと？」

「ああ、それだ。それと同じ階層にその解析結果を保存してる」
「OK」

それを聞いてまた何か始める

見る限り解析できたコードのパターンを専用ソフトに読み取って
る最中のようなだ

それが終わったと思ったら、またコンソール画面が出てきて何か処
理を始める

しばらくして画面に「Error Not Found」という
文字が表示される

「どつしたんだ？」

聞いてみると、仲村は画面から目を離さずに答える

「一応私のパターンデータベースから検索をかけたけど見つからないの。やっぱり新種みたいね」

仲村のお墨付きをもらう

「というかこいつのデータベースにないというのはある意味凄いことだ
ネットワークの様々なところに張り巡らされたパケットキャプチャ
を使ってこいつは片っ端からウイルスを捕まえている
それを解析して毎秒データベースに追加しているのだ」

「そんなデータベースに乗っていないということはまだ流れて間もないか、その網をかいくぐる高度なウイルスかのどちらかだ
おそらくあのウイルスは前者のタイプだろう」

「一部は高度な技術を使っているけどその他は一般的なウイルスと同じだからだ」

code 012 : (後書き)

ちよつと小ネタ

パケットって何のことか分かりますか？

携帯でEメールしたりインターネットしたりしたら毎月請求されるパケット代のことです

パケットとはデータを通信しやすいように細かく分けたものことです

データをそのまま運ぶと障害が発生したときに全部のデータが消えてしまいます

また、データが大きいと回線をそのぶん占有してしまい結果としてスピードが落ちてしまうのです

それらを解決するためにパケットがあるのです

データを複数のパケットに分けてしまえば途中でデータが消えてしまっても一部で済みますし、再送してもらったときにその部分だけで良いからです

また、小分けにしているいろいろな場所を経由することでリスクの分散にもなりますし回線を占有しない分早く送信することになるので

code 013 : (前書き)

がんばって可能な範囲で3日投稿を目指したいと思います
感想・批評があればお願いします！

code 013:

「とりあえず私の自動追尾ソフトを使ってどこから流れてきたか調べてる」

「そつか。じゃあしばらく時間かかりそうだな」

「下手すれば一日がかりかも」

まあ、それぐらいかかるだろうな

ウイルスをそのまま流出させる馬鹿はいないだろうから、いろいろ偽装工作をして隠して流す

だから発信元を探し出すのは結構苦労するのだ

まあ、しばらくここを占有されても特に支障はないからいいけど

「ということで結弦」

「んっ？」

「サーバの組み方」

「あゝ、はいはい」

忘れてた

まあ、どうせ暇だから良いけど

そう思いながら俺がいつもパソコンを組み立ててる机に仲村を連れていく

このあと俺は3時間ほど好奇心に輝いた目をした仲村に質問攻めに合うのだった

結弦と分かれたあと、俺は新しいソフトのアイデアを思いつき実習室でいろいろ試そうと思い、鍵を取りに職員室へ来ていた

「失礼しまーす。実習室を使わせてもらって良いですか？」

そう言いながら中に入ると、たまたま入り口の近くに立っていた先生が対応してきた

「おう、1年か。予習か？」

「はい」

「じゃあ、この鍵を使え。名前はなんていうんだ？」

「竜崎隼人です」

「そうか。まあ、がんばれよ。あつ、そうだ。帰る時はちゃんと鍵をかけるよ。最近忘れる奴が多いからな」

「分かりました」

無事鍵を貸してもらい実習室へ向かう

鍵をはずして扉を開ける

と同時に、中にこもっていた冷気が外に漏れ出して思わず身震いする上着忘れてた…

アイデアのことに夢中になって昼間の教室での諸注意を忘れてた

確か、冷房がきついから入るときは上着を持ってこないと下手をすると風邪を引くって言ったはずだ

そのときは侮っていたけど認識を改めないとホントに体を壊しかねない

次からは絶対持ってこようと思いつながら適当にパソコンの前に座る電源をつけて待つこと数分

やっとデスクトップ画面が表示される

各パソコンにインストールされているC言語開発ソフトを起動して、とりあえず最低限起動だけできるようにコードを打つ

さて、どうするか…
作りたい動作は分かっているがそれを実現するためにどんなコード
で書くかが問題だ

code 013 : (後書き)

仕事柄サーバルームに入ることがあるのですがやっぱり寒いですね…
スパコンルームには入ったことがないので分かりませんがたぶんサ
ーバルームより寒いと思います
それだけコンピュータって熱を持つんですね
では、また次回

code 014 : (前書き)

感想・批評、お待ちしています

code 014:

今作ろうとしてるソフトを一言で言うと『監視』ソフトだ
ありきたりだが、うまく発展させればウイルス対策ソフトだって作
れる

ただファイルやフォルダの監視は何となく面倒だから、ここは簡
単にキーボードの監視にすることにした
動作はこうだ

まずこのソフトを起動と同時にレジストリを書き換え、マシン起動
と同時にこのソフトが動くように設定する

レジストリというのはwindowsの設定ファイルのようなものだ
そのあとは目立った動きはしないけど裏ではしっかり動いてる

通常キーボードでキーが押された場合、まずOSがその事を検知する
そしてキーが押されたという情報をOS上で動いているソフトに受
け渡すようになってる

このソフトは、そのOSからソフトに情報を受け渡すところを監視
し、その情報を収集する

こうしておけば、ソフトが起動してる間にどうキーボードが操作さ
れたか見ることが出来る

ちなみにこの動作、『キーロガー』と呼ばれる悪質なソフトと同じ
だったりする

キーロガーもキーボードの入力情報を収集して外部に記録を送信する
クラッカー等の攻撃者はそれを解析してパスワードや技術を盗み出す
だけど今作ってるソフトは収集した記録はどこにも送信しない
今のところ送る場所もないから送りようがないし

この点がこのソフトとキーロガーの違いだ
とりあえずキーの情報を取得するコードを埋め込んで、いったん起
動してみても動作確認をする

こうやって細かく動作確認をしながら開発していくと意外と早く進

んだりする

変なバグを最初のほうで見つけやすいからだ

そうやってキーの監視のプログラムはうまく動作してるみたいだから今度はソフトをステルス化する

ステルス化といっても、ソフトが起動していてもタスクバーに表示されないようにしたりするぐらいだ

もっと本当に気づかれないうような方法もあるとは思っただけどまだ知らない

これから調べないとな、とか思いながらとりあえず完成させた
完成したソフトを起動してみて：あせった

自分の知識で作ったのにソフトがどこで動いてるのか本気で分からなくなった

慌ててコードを読んでどういう動きになっているのか確認しようやくソフトを見つける

正直、本気であせった

たぶんこれぐらいの技術じゃうちの学校の先生の目はごまかせないだろう

見つかったら絶対怒られる

今度から目印になるようなものをつけて起動するようによつと誓いながらソフトを終了する俺だった

code 014 : (後書き)

小説とまったく関係ないですが、やっとEIPパスポートの試験が終わりでした…

さすがに試験の1週間前になると勉強しなきゃと焦りだしてここ最近小説を書けていなかったのだから書いていきたいと思えますちなみにぜんぜん勉強をしていないのでたぶん落ちました(笑)

code 015 : (前書き)

感想・批評お待ちしております！

code 015:

「はあ……」

同じ作業の繰り返しに思わずため息をもらしてしまう私

ここは、この国立富士城学園が誇るスパコンである「FUJISHIRO」が設置されている実習室

その「FUJISHIRO」の裏側でさっきから延々とLANケーブルを挿してまわっていた

計算システムの授業の集合場所であるこの実習室でつまらない説明や諸注意を聞いて今日は解散になったのだけど、そのあとが暇になっってしまった

暇つぶしにスパコンを眺めてまわっていたら、たまたま近くで何かの作業をしていた先生に捕まっけししまい配線作業を手伝わされる羽目になってしまった

かれこれ1時間はず……とLANケーブルを挿してまわっている

「はあ……」

ため息しか出てこない

ちよつどこの区画のLANケーブルを挿し終えたからカバーを閉じて、伸びをする

ついでに横目でどのくらい残っているかチラッと見てみた

「……………」

見て後悔した

何しろまだできていないところが30メートル先まで続いている

「…はあ」

やる気がなくなっちゃった
ちよつと気晴らしに外で何か飲んでこよ

そう思つて財布がポケットにないことに気づく
そういえば作業に邪魔だからって教室においてある自分のカバンに
入れてきたんだ

そのことを思い出し計算システムの教室まで戻ると、教室に備え付けられているパソコンで誰かが何かしている
何やってるのかしら？

遠目から見てる限り何か操作してるようにしか見えない
近づいてみるとそれは見知った人間だった

「こんなところで何してるのよ？竜崎」

とりあえず声をかけてみる

「ん？北園じゃん。そっちこそ何やってんの？」

「私は先生に手伝いさせられちゃって。で、あんたは私の机で何やってんの？」

そう、竜崎が今座ってる机は私の席だ

まあカバンは机の横にかけてるから別に邪魔にはなっていないけど

「えっ？ここってお前の席だったのか？悪い悪い、適当に座ったからや」

そう言いながらもまったく悪びれた様子はない
別に文句を言う気もないけど

「それで？何やってんの？」

「ああ。ちよつと興味を持ったからキーロガーもどきを作ってる最中だった」

「…もしかして私を監視するつもりだった？」

ちよつと冗談で言ってみる

「んな！？な、な訳ねえよ！第一データを送信する機能ないし！」

冗談で言ったのに本気にしたようだ
ちよつと面白い

「へえ〜。そんなこと言つて、ホントは変なこと考えてたんじゃないの？」

「そんな訳ねえだろ！」

「ホントに？」

「ホントにホント」

竜崎をからかうのはホントに面白い

code 015 : (後書き)

情報遅いですけど少し前にテレビで量子暗号を取り上げていました
量子暗号というのは量子力学の特性を利用した暗号通信のことで、
これが実用化された場合まったく盗聴されない通信ができるそうです
今はまだデスクトップパソコン並みの大きさでしたが、そのうち小
型化して携帯みたいなものにも載せられるようにするらしいです
技術って日々進歩してるんですね

「それで？そのキーロガーもどきはできた訳？」

「一応な。だけどそれがどこで動いてんのか自分で分からなくなつて今あせつてたとこだ。とりあえず見つかったけどな」

「惜しいわね。竜崎が見つからなかったら授業中に探しだして先生に指摘しようかと思つてたのに」

「冗談だよな？」

引きつった笑顔で聞いてくる竜崎

だから私は満面の笑顔で言つてやった

「本気よ」

「危なかつた〜…」

本気で安堵してるし

まあ、良いけど

「それじゃあもう帰るの？」

「まあ、もどきはもうできたしな。そろそろ帰る」

「ちようど良かった」

「へっ？」

竜崎がぼかんとした顔で私のほうを見る

「手伝いなさい」

「何を？」

「ケーブルを挿す作業」

「なんで？」

「暇なんですよ？」

「まあ、一応」

「なら良いじゃない」

「え〜〜」

不服らしい

物凄く嫌な顔そつな顔をしている
ということだ

「手伝いなさい」

「あ、あの。満面の笑みはいいのですが、その握り締めた右手こぶしは何でしょう」

「断ったらどうなるか分かってるんでしょうね？という意味表示」

「分かりました。喜んで手伝わせてもらいます」

どうやら私の満面の笑みに手伝う気になったらしい

まだ若干渋ってる竜崎の首根っこを掴んで、半分強引に拉致して手
伝わせる私だった

code 016 : (後書き)

なんとなく用語解説です

たぶん次か次の次の話で出てくるのでその予習とでも思ってください

「IPアドレス」

コンピュータのネットワーク上での住所に相当するものです

ホームページの閲覧、ダウンロードやファイルの受け渡し、メールの送受信などネットワークを通るものならこのIPアドレスが必ず必要になります

「Macアドレス」

物理アドレスとも言われます

LANカードなどの機器に付けられています

IPアドレスと同じでネットワーク通信では必要になります

code 017 : 04/08 (前書き)

始業式の次の日です

感想、批評お待ちしております！

始業式の次の日

この日から通常授業が始まって俺達はスパコンの置いてあるあの寒い実習室で授業を受けていた

今は4時間目がちょうど半分ぐらいが過ぎた頃だ

ちなみに朝からずっとここで授業をしているんだけど、薄着で来た連中の半分ぐらいが保健室送りになっている

恐るべきスパコンルームの冷房：

そんな授業を頼杖つきながらぼくっを受けていると、ポケットの携帯が震えだす

先生がホワイトボードに教科書の写しを書くため後ろを向いた際に机の下で携帯を開き送信元を確認すると、自分のパソコンのアドレスだった

そういえば昨日、仲村に頼んで追尾プログラムでウイルスの感染ルート調べてもらったのをすっかり忘れていた

感染ルートを自動追尾する設定にしたあと、結果が出たら俺と仲村の携帯にメールが届くようにしてもらった

それが今届いたらしい

詳しい結果はパソコンを見ないと分からないけど、送信元のIPアドレスやMACアドレスなど最低限の結果だけは表示するようになっている

とりあえずメールを開いてみる

IPアドレス：Unknown

MACアドレス：Unknown

「はっ？」

「どうかしましたか？神鷹君？」

「あつ、いえ。なんでもないです」

思わず変な声を出してしまったけど、これには目を疑った
今まで何回か仲村のあのソフトでウィルスの感染ルートを調べても
らったことがあるけど見つからなかったことはこれが初めてだ
とりあえず、仲村に聞いてみようともメールをうつ

『IPアドレスもMACアドレスも見つからないけど、これってど
ういう事だ?』

…よし、送信完了

しばらく白板を眺めていると返信が返ってくる

『今、授業中』

……

きちんと授業を受けると怒られた

まあ、急ぐことでもないから授業が終わるまで机の上のパソコンを
いじって遊んでいた

「それじゃ午前中の授業を終わります」

「ありがとうございます」

全員の号令でやっと授業が終わった

そのまま机に座りなおしてもう一度さっきの結果のメールを眺めて
みる

けど、やっぱりまいちよく分からない

「…結弦、まじめに授業受けないと駄目だよ」

と、いつの間にか仲村がそばに来ていた

「悪い悪い。それでどうということなんだ？これ」

苦笑いで返しつつ聞いてみる

仲村は口元に手を当てて、しばらく考え込んだあと話し始めた

code 018 : (前書き)

感想・批評お待ちしております

code 018:

「たぶんウイルスを流したコンピュータがネットワークに繋がってないんだと思う」

「へ？なんで？」

「いまいち分からない」

「あのソフトはサーバに残ってるログを見て、そのログのIPアドレスにpingをして返事が返ってきたらそこに移動して、ていう風につけるから。途中でログを消されたらそこで止まっちゃうしネットワークから切り離されてたらpingしても返事返ってこないから」

「たしかpingするのは指定したIPアドレスに適当なデータを送ってみて、それで返事が返ってくるかどうかでそのIPアドレスを持つてる相手がネットワークに繋がってるか調べるコマンドだったはずだ」

pingをして返事が返ってこないってことはネットワークから切り離されてるってことか

「じゃあ、途中で止まるわけだ…って、待てよ」

「なんでネットワークから切り離されてるってことになるんだ？サーバのログを消されたってこともあるんじゃないのか？」

「解析結果を見たときに、サーバに進入する方法を知らないような印象を持ったから。あくまで予想だから分からないけど」

「なるほど、ソースコードでそんなことまで感じることができるとか。やっぱり奥が深いな」

「それで、詳しくは見れないのか？見失う直前のログとか」

「見えるけど携帯から操作なんてできないし」

「やっぱり無理か。とりあえず飯行こうぜ」

「うん」

これ以上ここで話していても意味がないからさっさと昼飯を食べよう
俺は椅子から立ち上がり仲村を引き連れて、実習室の出口に向かう
のだった

//

「やっぱり混んでるな…」

「だね…」

今はお昼の真っ最中

場所は学食

混んでないわけではないんだけど、時間を少しずらしただけでここま
で混みようが違うとは思わなかった

いつも私達、幼馴染のメンバー5人は4時間目の鐘がなるとすぐさ
ま学食に駆け込んだから、さほど人は気にならなかったんだけど…

「ゆり達、いる？」

「ん〜。北園はおるか案外背の高い神池すら見えない」

私より背の高い結弦すら先が見渡せなくなるほど人で混んでた

「どうする？パンにでもするか？」

「でもそれじゃあ、結弦がお腹すかない？」

結弦は細身の体に似合わず案外食べる

それに前、先生に用事を頼まれてぎりぎりに学食に滑り込んで、だ
けど半分ぐらいかき込んだところでタイムアップになっちゃって

その時は、放課後までずっとお腹を鳴らしていた記憶がある

「大丈夫だって。余分に買うから。それにこんなに混んでちゃお前
が机までたどり着けるか心配だしな」

「…そんなことないもん」

ちよつとすねてみる

確かに以前もこのぐらいの時間帯に来てしまったとき、何とか料理
は確保したものの人ごみで動けなくなったことがあった

code 019 : (前書き)

ラブコメってどんな風に書けばいいんですかね？
とりあえず手探りでやってみていきます

そのまま立ち尽くしていると、見かねた結弦が人を掻き分け助けに来てくれた

そして私を慰めながら一緒にご飯を食べたのだ

…今考えても少しドキドキする出来事だった、私にとって

と、私が物思いに耽っていると、ポンツと私の頭の上に何かのがっかつた

顔を上げてみると結弦の手だった

「じゃ、ちよつとパン買ってくるわ。仲村はこの辺にいてくれ」

「あつ…」

私が呼び止めるよりも早く結弦は人ごみの中に消えてしまった

なんだか喧騒が急に大きくなった気がした

やっぱり結弦がいないと心細いな…

結弦が帰ってくるまで柱にもたれながらずっと地面を見つめていた

「ふう…」

やっとあの人の波から抜け出ることができた

今俺の両手に下げている袋には焼きそばパンにカレーパン、アンパンにジャムパンそれにおにぎりが3つほどとコーヒー牛乳が1本ずつ入っている

人波に飛び込んでから仲村に何がいいか聞くのを忘れたことに気づ

いたけど、
戻ったらパンが全部売り切れそうな勢いだっただから、いつも仲村が
買っているアンパンとジャムパンを買っておいた
元いた場所に帰ってきたのは良いけど仲村が見当たらない
少し探すと、近くの柱に背をもたれているのを見つけた

「悪い。何がいいのか聞くのを忘れてた」

「ううん、いいよ何でも」

「そうか。とりあえずいつものアンパンとジャムパンを買っておい
た」

「ありがとう」

頬を赤らめながら俯き気味にお礼を言う仲村

… やっぱりこいつは可愛い、うん

「それで、どこで食べるの？」

「俺の部屋」

「へっ？」

聞き返される

「食べるついでに追跡結果を見てくれないか？」

「あっ、忘れてた。それじゃ今から、行く？」

「おっ」

というところで二人で俺の部屋に向かうことに

「それじゃまた借りるね」

「おう」

そうやってパンをかじりながら仲村がディスプレイに向かう
俺はベッドに座りながらのんびりと、その光景を眺めていた

「詳しい結果が出たよ」

ディスプレイを見ながらそう言ってきた

俺もそのディスプレイを見るためにそばに行く

「どうだったんだ？」

「やっぱり見つからなかったのはパソコンがネットワークから切り
離されたからみたい」

そう言ってディスプレイを仲村は指差した

code 020 : (前書き)

感想、批評お願いします

たぶんテンションあがって執筆スピードが上がります
たぶん

code 020:

「このソフトで記録させた履歴の一番最後を見てみると…ほら、ちやんとIPアドレスは載ってるの」

「ホントだ」

ディスプレイにはサーバ名と接続元、接続先に並んでIPアドレスも載っていた

「それで一番最後の履歴のIPアドレスにpingをしてみたら返事が返ってこなかったから、たぶんここだと思う」

「このIPアドレスのパソコンのある住所とかって分かるか？」

「ちよつと待って」

そうやってキーボードをまた叩きはじめる
するとディスプレイに何かの表が出てきた

「何だこれ？」

「このIPアドレスが登録されているプロバイダのIP一覧表」

「ってことは…」

「プロバイダに進入したけど…何か問題でもある？」

「いや、あるだろ」

平然と一瞬でプロバイダにハッキングして情報を盗んでるし、悪びれた様子が一切ないし

とりあえず後で良く言い聞かせないと

一応犯罪なんだし

「????？」

分かってないし
…仕方ない

「それで、この中にIPあるのか？」
「うん、これ」

仲村がちよっとコマンドを打つと、表がスクロールしてあるIPが
点滅しだした

「ホントだ。それでこのIPアドレスが使われている地域とかは？」
「えっと…それはこっち」

再びコマンドを打つと別の表が出てきて、IPアドレスの表と並ぶ

「えっとこれを見ると…えっ？」
「どうした？」

驚く仲村の目線の先に視線を向ける

「えっ？」

俺も驚いてしまう

そこに表示されていた団体を見ると…

「富士城学園って…ここ!？」
「やっぱり、そうだよね…」

二人してしばらく画面を見ながら固まってしまふ

「ちょっと待ってて。学園の全IPの表をだすから」

石化からいち早く抜け出した仲村はそう言って、キーボードを叩くとディスプレイに別の表が映し出される
意外にデータ量は多い

「これに学園中のパソコンのIPが載ってるのか？」

「うん」

頷く仲村

「というか、これだけの物いつ調べたんだよ」

「えっと、昨日自分の部屋に帰ってから、職員室のファイルサーバーに潜り込んで、設計図から何までもらってきたの」

「何の為に？」

「えっ、だってあったら何かと便利じゃない？先生がリモートの画面でパソコン画面を覗いてるときにダミーを流しちゃえばこっちが何しても気づかれないし」

…そんな理由でIP収集するなよ

「お前、授業について行けるか心配してたくせに、結構余裕だな」

「だって、実際やってみたら結構簡単な内容だったから。練習問題もレベル低かったし、ちゃんと次の授業の予習もしたもん」

そういつて頬を膨らませてすねてしまう

code 020 : (後書き)

ネタが無い……

最近ここで書いている小ネタのネタが無くて困ってます

別に何でもいと言われればそれまでなんですが

何かリクエストがあったらお願いします

ここで解説したいと思います

code 021: (前書き)

感想批評リクエスト等待着てます!

code 021:

「はあ…」

ため息を吐くしかなかった

とりあえず仲村の機嫌を直さないとIPを調べてもらえなくなる

「分かった分かった。そうすねるなよ」

「む〜〜〜」

まだ機嫌が直らない

頬を膨らませてすねている

こうなったら最後の手段だ

俺はこうなることを予測して、ポケットに忍ばせておいた一枚の紙を取り出す

「これやるから機嫌直せって」

訝しげにその紙を見ていたが、その紙が何なのか分かったとたんに表情が変わる

「これって今話題沸騰中のカフェ『Saidus』の限定スイーツの予約券!? なんて結弦がこんなの持つてるの!?!」

輝いた瞳で俺に詰め寄る仲村　っていうか、

「顔が近いつて」

「!!!???　っきゃあ!?!」

慌てて飛びのいて椅子から落ちた

「大丈夫か？」

「うん…。でもホントにどうしてこの券持ってるの？これって限定50枚で、私がお店に朝7時から並んでても取れなかった幻の券だよ！？」

「いや…。竜崎の奴が持つてくる勝手に引き受けた頼みごとを毎度のことながら片付けたらお礼にもらった」

「そんな簡単に…私の苦勞はいったい……」

「まあ、いいじゃん。行きたかったんだろ？」

「うん！ありがとう！」

ぱあっ、と輝いた笑顔を向けてくる
やっぱりつつい見とれてしまう

「あつ…、でも…、どうしよう…」

「んっ？今度は何だ？」

笑顔から一転、俯いて何かぶつぶつつぶやいてる
すねたり喜んだり椅子から落ちたり忙しい奴だ

「えっと…。暇ならでいいんだけど…、えっと…その……」
「??？」

しばしの沈黙、何かを言いよどんでる
そして

「私と一緒に食べに行こう！！」

まるで告白するように恥ずかしそうに仲村が願うする
こんな可愛い姿を見たら断れる訳もなく

「ああ、いつでもいいぜ？」

と、了承の返事をする

「ホント？ホントに大丈夫？」

「行くときは声をかけてくれよ？」

「うんっ!!！」

本当にうれしそうに顔を綻ばせている

そんな仲村の様子を見て俺も気恥ずかしさで顔が熱いとその時、5時間目開始の予鈴の鐘が部屋に鳴り響く

「あつ、そろそろ実習室戻らねえと」

「そうだね、じゃあまたこれは放課後だね」

「そうだな」

そう言いながら、実習室へと急ぐのだった

code 022 : (前書き)

授業中に居眠りしてはいけません

「神池、ちょっとこい」

始業式の翌日からもう通常授業が始まった

授業が終わって放課後何しようか考えながら実習室にある教室を出ようとしたとき、6時間目の授業の担当の先生が俺を呼び止めた

「何ですか」

「担任がお前のことを呼んでたぞ。放課後に職員室に来て」

「何ですか？」

「いや、俺もそこまでは聞いてない。とりあえず伝えたからな」

「へーい」

メンドクサイな、俺なんかやったかな？

と、思いつつ心当たりはあったりする

昨日も徹夜で友達のところまで遊んでたら1、2、3時間目は爆睡してしまった

4時間目の授業は鬼教官として有名で俺らの担任である松原先生なのにそこでも寝てたら出席簿が俺の頭にめりこんだ

そして帰り際に「放課後覚悟しとけよ」という言葉を残して職員室に帰っていったのだ

何やらされるんだか

半ばあきらめながら職員室へ向かう

「失礼します、松原先生はいますか？つてあれ？」

とりあえず中に入ってみたけど松原先生どころか先生が一人もいなかった

どうしようかと職員室の中を見回すと松原先生の机に置手紙のようなものが見えた

近づいて読んでみると今度は実習室の地下室に来いって書いてあった

「めんどくせー」

ぼやきながら職員室を出て地下室に向かう

いつも入っている実習室の入り口を通り過ぎその横の細い通路へと進む

地下室は実習室の入り口と正反対の位置にある

砂利を踏みしめて着いてみるといつもは固く閉ざされているように見えた地下室への扉が少しだけ開いていた

「先生いますか？」

扉を開き中を覗いてみるも人の気配がしない

仕方がないからそ〜っと慎重に中に入る

実習室の地下室は防犯上の理由で無断立ち入り禁止なのだ

他の先生に見つかったら厄介だ

ただど中に入ってもやっぱり誰もいないし

そのまま入り口から見て左手にある階段を下りる

そして地下室への入り口のドアを開ける

「さむ…」

スパコンから発生した熱を冷やすためのクーラーの冷気がもろに地下室に流れ込んでいるから相当冷える

少し寒さに震えながら周囲を見回すとやっと松原先生を見つけた

「先生、何か用ですか？」

「おう、神池、やっときたか！ちょっとお前に手伝ってもらいたいことがあってな」

「なんで俺を名指して呼んだんすか」

「お前いくらなんでも授業中寝すぎだ。その罰」

え〜〜、メンドクサイ

「そんな顔するな。何なら帰ってもいいが」

「ホントっすか？」

「ああ、だがお前の内申に響くのは覚悟しとけ」

「うっ…、やります……」

「そうか」

俺は結構授業中でもこっそりとだけどやりたい放題やってて成績も結構危なかったりする

まだ新学期始まって間もないがこれ以上成績が下がったらマジでやばい

ここは先生の言うことを聞いとこう

code 023... (前書き)

さ、最近ネタが…
探さないと…

「で、何やれば良いんすか？」

「ちよつと付いてきてくれ」

言われて松原先生に付いていく

そんな遠いところじゃなくて、元いた場所から10メートルぐらい先の場所だったんだけど、そこには天井から何やらケーブルが巻かれて垂れ下がっていた

ふと奥のほうを見ると同じような状態の場所が奥にさらに続いていた

「ここにケーブルが垂れ下がってるだろ？長すぎるから紐で巻いてるんだが、この紐をカッターか何かで切ってあっちの方までケーブルの先を持って行ってくれ」

先生が指差すほうを見ると何やらLANケーブルの端子口らしき穴がかなりの数空いた機械があった
たぶん大型のハブみたいなものか？

「あのハブっぽいところまでケーブルの先を持ってけばいいんですけど？」

「ああ。これと同じものが50個あるからもたもたしてたら遅くなるぞ。じゃあ頼んだ。あつカッターはこれを使い」

そう言ってカッターナイフを俺に渡すと、さっさとどこかへ行ってしまった

せめて先生も手伝ってくれば早く済みそうなのに、手伝わねえのかよ

「…さつさと済ませるか」

毒づいていてもしょうがないからさつさと始める
とりあえず片っ端から紐を切って回る

それからケーブルを運ぶのだがハブっぽい機械までが結構遠かった
りする

距離にしてざつと30メートルくらい

それを50往復

…考えるだけでやる気が失せる

だからあまり考えないように黙々と運ぶ

ケーブルを10本くらい運ぶと体が温まってきたからかだいぶ寒く
なくなった

「……やつてらんね」

そんな咳きはスパコンの動作音でことごとくかき消された

「やっと終わった〜」

息を切らしながらハブっぽい機械の前に大の字で倒れる

何しろ垂れ下がってるケーブルと機械まで、一番近いところは30
メートルくらいだったが、だんだん離れていくと100メートルぐ
らいになっていった

正直5キロぐらいの道のりをダンベル担いで歩いた気分だ

寝っころがったまま首だけ機械に向けて、なんとなく眺めてみる

何でこんなにケーブルがあるんだよ……

ちょっと恨みの目で機械を見ても意味はないけど

と、ふと視界に別のケーブルを見つける

あんなところにケーブルあつたんだな
でも、そのケーブルの先は俺がさっきまで運んできたケーブル群と
は別の方向に伸びている
別のところから伸びてんのか？

「おう、神池。終わったか？」

俺が疑問に思いながら眺めていると、絶妙なタイミングで先生登場
先生、実はそのへんで見てたんじゃねえだろうな？

「一応終わりました。もう帰っていいつすよね？」

「何言つてんだ？まだもう一仕事あるぞ」

「マジですか…」

正直マジ勘弁してほしい

メンドクサイし疲れるしもう帰りたいんですけど
だけど帰ったら成績がひどいことになるのは確実だ

……こんなことになるならマジメに勉強しときゃよかった
そう後悔しながら先生に付いて行かざるを得なかった

code 024 : (前書き)

ヤバイ

最近ゲームを作るほうに熱中して書いてない……
どうにかしないと

code 024:

「それじゃ、あのIPのパソコン特定よろしく」
「はい」

そう言つて仲村は机に向かって猛烈な速度でキーボードを叩きはじめた

放課後、俺と仲村は再び俺の部屋に集まっていた

理由はもちろん、ウィルスの発信元と見られるIPアドレスのパソコンの特定だ

幸いにも仲村がなんとなく集めた(盗んだのほうが適切か?)パソコン情報のデータベースがあるからそんなに時間はかからないはずだ

案の定、手を休めた仲村が振り返り結果を口にする

「みつからなかったよ?」

「はえ?」

予想外の結果に思わず変な声を上げてしまう
というか、なぜ?

「あのアドレスはこの学園のアドレスだったよな?」

「うん。この学園のプロキシサーバのアドレスだったよ?」

一応補足説明をしておこう

プロキシサーバというのはインターネットと、学校や会社といったLANとの代理マシンのようなものだ

大量にあるパソコンを、すべてそのままインターネットに直接繋げることができないはないだろうが、

ウイルスやクラッキング等の脅威へのリスクが高くなることや、データ漏洩のリスク、管理が大変だったり、いろいろと面倒だったりする

その為、会社や学校といったLANを構築しているようなところではプロキシサーバというのを導入しているところがほとんどだ

このサーバの役割としては、インターネットとLANの行き来する情報の監視、不正なアクセスの遮断など、いわばLANの代理としてインターネットとやり取りするサーバだ

んで、仲村が今言ったのは、見失っていた最初のIPアドレスがこの学校のプロキシサーバだったという訳だ

要するにこのウイルスは、この学校のパソコンを使って誰かがインターネットに流したという事だ

「ローカルアドレスは分からなかったのか？」

「分かったんだけど…、私の取ってきたデータベースになかったしpingを打つても返事が返ってこなかったからこのIPは今使われてないみたい」

「じゃあ、どこのパソコンか分からないってことだよな」

「そうなるね」

まあ、別に急ぐわけでもないし、犯人を突き止める義務もないわけだけどノンビリと罫でも張って待つことにしよう

「そんじゃ、仲村。もしかしたらそのIPが繋がることあるかもしれないから監視プログラムを動かさしといてくれないか？」

「分かった」

そう返事を返して再び机に向かう仲村

「できたよ」

「おう、サンキュー」

何のソフトを使ったのかは知らないが、ものの数秒で準備ができたらしい

相変わらず仕事が早いことで

「そういえば聞いてみたかったんだけど…」

「何を？」

「何でそんなにこのウイルスの事調べたがるの？いつもなら珍しい動きしてても解析してそれで終わりなのに」

なんだ、そんなことが

「別に、単なる好奇心。まあ、気まぐれだな」

「ふうん」

と、仲村にはそう言ったが嘘だったりする

実のことを言うとは解析したウイルスのソースコードに見覚えがあったそれは結構昔のことで、俺がハッキングの世界へ少し足を踏み入れていたときだった

とある掲示板で気が合う人と知り合った

いろいろ話をして、俺に高度なハッキングのノウハウを教えてくれたプログラムの効率的な書き方とか、動きが早い書き方とか

そのやり取りでコードを見たことがある

その時の俺は、本当にその人のことを尊敬していたんだけどある日突然一切の連絡が取れなくなった

それ以来、その人とは会っていない

その時に教えてもらったコードの特徴、それだけが唯一の手がかりとなった

そんな昔のことなのに、まだ覚えてるとはな…

「はあ…」

小さく溜息

その人は今どこで何をしているのか

ずっと探していたらこんなところに手がかりを見つけた

やっとあの人に再開できるかもしれない

そう思うと心が弾むのを感じた

まあ、それでも今は待つしかないんだけど

「とりあえず暇になったし、晩飯まで外をぶらぶらするか」

「そうだね」

そうして俺と仲村は、あてもなく学校内を散策するために部屋を出るのだった

/ /

「さて、どうするか」

放課後、俺はすることもなく適当に校内をぶらぶらしていた

昨日みたいななんか思いつきで作れば良いんだろっけど、何となく

そんな気分じゃなかった

となると、やることがなかった

暇だ~~~~

本当に意味も無く歩いている

なんか思いつかないもんかな

と、考えていたら、やたらと長いこの学校の渡り廊下の先から結弦

と仲村が現れた

何となく声をかけてみる

「おい、結弦、仲村。何してんだ？」

「お前こそ何してんだよ」

「放浪の旅だ」

「あつ、そう」

「そんで？そつちは何してんだ？」

「昨日お前のお人よしな性格で引き受けたウイルス駆除をしたろ」

「そうだった？」

えっと、笑顔で握りこぶしを掲げるのは止めてくれませんか？怖いので

「そうでした、結弦さんに頼んでウイルス駆除をしてもらいました。ありがとうございます」

「よろしい」

とりあえず握りこぶしは下ろしてくれた

code 026 : (前書き)

お盆も終わりですね

自分は今うちよっと休みがあるんで、その間に小説を書き溜めとか
ないと(汗)
ではどうぞ

code 026:

「ちょっと気になったから仲村に頼んで、あのウイルスの発信元を探してもらってたんだ」

「へへ。で、何か分かったのか」

「それがな……」

結弦が言葉を濁す、何だ？

顔を近づけて周囲に聞こえないように小声で続ける

「今のところ分かっているのは、この学校のプロキシサーバーのアドレスから発信されてたって事だけだ」

「こここのアドレス!？」

「ちよっ! バカ、大声出すな!」

慌てた結弦に口を塞がれる

いや、でも

驚くから普通

「……って事はこの学校にいる誰かが犯人?」

「だろうな。わざわざ外部から流しに来るバカはいないだろうし」

「で? どうする気だ?」

「何が?」

「その犯人。放置しても良いんだろう?」

「まあ……そうなんだけどな……」

なんか歯切れ悪いな

いつもなら新種のウイルスを見つけても駆除してワクチン適用して
終わりなのに

「どうしたんだ？」

「いや…、ちょっと気になることがあって」

「気になること？」

「ああ。あのウィルスのコードの癖があの人に似てたんだ」

「あの人って…お前にいろいろ教えてくれたって言う… Sage のことか？」

黙って頷く結弦

「それでどこから発信されたってのは分かったのか？さっき、たどり着いたのはこの学園のプロキシサーバだったって言ってたけど、どのパソコンかは分かったのか？」

「それを今調べてるんだ。なんかいつの間にか仲村がこの学園の全部のパソコンのアドレスを調べてて、それを使ってみただけで見つからなかったし」

そう言つて結弦が自分の後ろを指差す

何の気になしにその指の先に目をやると暇そうにしている中村が

あれ、いない？

ニヤ

ん？猫か？

鳴き声のほうを見てみると、どこから持ってきたか謎なネコじゃら
しで猫と遊んでいる仲村がいた
やっぱり待ちきれなくなつてたんだな

まあ、いいか

と、仲村のことは置いといて

それにしても妙だと思つ

この学園はコンピュータの専門学校だけあってパソコンの管理は
徹底してる

学校に申請していないパソコンを学内イントラネットにつながるものなら、どこで監視してんだかその日の放課後には呼び出されて怒られる

まあ、USBメモリーに入れて授業中に流すって手もあるけど、それならそのパソコンのアドレスが残るはず

というかそれしたら一発で先生にもばれて反省文書かされる羽目になる

code 026 : (後書き)

猫、いいですね

仲村は動物全般が好きという裏設定にしているので、ちよくちよく動物と絡ませていききたいと思います
では次回

なのに学校内のどのパソコンも引つかからないという
という事は先生が普段監視していない場所で繋がってるってことだ
ろう

この学校じゃ生徒が一般的に使うパソコンと、先生が使うパソコン
は別のネットワークに繋がっている

先生が主に監視しているのは生徒用だからそれ以外だと分からない
のかもしれない

だけどやっぱり、今は待つしかなさそうだな

「てか、なんで学校中のパソコンのIPを調べてんだ、仲村は？」

「……簡単に言うと先生の目を盗んでやりたいほっだいするために」

「そんなことしないもん」

「うわぁ！」

びっくりしたじゃねえか！突然現れるな！

「授業中に予習していると先生に怒られるからカモフラージュだも
ん」

「わかったわかった」

いつの間にか猫もいなくなっていた

というか足音もなく近づくなよ、猫みたいなやつだな

「とりあえず話を戻すと、この学園内のPCのアドレスには引つか
からなかったんだよな。監視とかしてんのか？」

「一応、仲村特製ソフトで学園のネットワークを監視してその？P
が出てきたら分かるようにはしてる」

「ふん。じゃあそれまでやることなしなんだな」

「そういうことだ」

「それじゃ、晩飯まで狩りしようぜ！」

「お、いいな。というところで仲村、ちよつとやってくるぜ」

「あ、ちよつと待って」

そういつてごそごそと自分のかばんを漁る仲村

中から取り出したのは……俺たちが持っているのと同じだった

「私もまぜてくれない？」

結局晩飯まで3人で狩りをしていたのだった
ていうか仲村メチャクチャ強いな!?

/ /

それぞれが各々の放課後を満喫している中、その男は一人パソコン
に向かっていた

一心不乱にキーボードを打っている

彼の正面のディスプレイには何やら意味のありそうな、しかし素人
では読むことすらできない英語の羅列があった

程なくすると英語の羅列が並んでいたディスプレイにはひとつの
アイコンが現れる

アイコンは紫色の髑髏が毒々しい絵だった

そのアイコンをしたソフトはパソコンに挿されているUSBメモリ
でディレクトリに吸い取られ、画面中央に正常に書き込みが完了し
たことを知らせるメッセージが表示される

それを一瞥した男は、強引にUSBメモリを引き抜くとズボンのポケットにねじ込み部屋を後にするのだった
廊下を歩く彼の後ろには二人の少年と一人の少女がやかましく騒いでいる声が響いていた

code 028 : 04/09 (前書き)

小説に出てくるソフトを作ってみようかな、と考えてる今日この頃です

あっ！

ウイルスじゃありませんよ!?

もうちょっとしたらでてきますんで

始業式があった週の金曜日

眠い〜〜〜〜、……っ!?

頬杖をつきながら授業を受けていたら、ついうとうとして顔面から机に突っ込みかけた

とりあえず背筋を正して何事もなかったかのように振舞う
そして周りに見られていなかったか、さりげなく確認する

よし、大丈夫みたいね

ぎりぎり誰にも見られてなかったみたいだ

それにしても…暇だ

学科での授業が始まったのはいいんだけど、最初の2、3週間は今までの復習らしい

一応それなりに勉強をしてるつもりだから基礎の基礎なんか聞いてもつまらないだけ

だから小説を持ってこようと思ってたんだけど、あいにく自分の部屋の机の上に忘れてきてしまった

やることなくばっつとそのまま授業を受けてたら、隣から腕をつつかれる

そっちに目をやると、隣の席の男子が声をかけてきた

「ねえ、ちよつと教科書貸してくれないかな?」

なんとなくその男子の机を見るとノートはあるけど教科書がなかった
まあ、どうせ授業なんて聞いてないから「どうぞ」と言って渡す

男子は「ありがと」と言っつて、再び授業に戻る

仕方がない、寝ようかな

先生にはれないように

そうして私は眠りの闇に落ちていった

「北園さん、授業終わったよ」
「んっ……」

誰かに揺り動かされて眼を覚ます

ぼんやりとしていた意識がだんだんとはっきりしてくる
周りを見てみるともうほとんど机にはいなくて、たぶん休み時間だからどこかに行っただろう

「起きた？」

声のしたほうを見ると、さっき教科書を貸した中野がいた

「やっと授業終わったか」

あくびをしながら伸びをする
のんびりしてる私の横で中野はずっと立っている

「なに？」

「教科書を返そうと思って」

「ああ、だったら私の机に置いておいてくれればいいのに」

わざわざ声かけなくても、というのは言わないでおく

「ありがとね、困ったときは僕に言ってくれるとうれいな」

「まあ、考えとく」

そう言って、中野はどこかに行こうとして 思い出したように振り替える

「そうだ、この間はありがとうって、竜崎君と神鷹君に言っという
くない」

「へっ？なにそれ。何かしたの？」

「僕のパソコンがウイルスに感染しちゃったから駆除してもらった
んだ、助かったよ」

「ふうん、分かった伝えとくわ」

そう返すと、今度こそ中野はどこかへ行ってしまった

たぶん彼が竜崎に頼んでまた結弦が駆り出されただろう

結弦がちよっと気の毒かも

そんなことを思いながらどうしようかな、と考える

私もちよっとジューズでも買ってこよ

正直このままだと、お昼休みまでの残り2時間も寝て過ぎそうだ
からのど渴いたし外に出ることにした

code 029 : (前書き)

昨日の活動報告でも書きましたが、この小説をいちから見直して一部書き換えました

前では一部読みにくい箇所があったので、そういつところを直しました

何か他にも意味が分からないところやおかしいところがあったら指摘ください

では、どうぞ！

ピツ、ガコン！

自動販売機から出てきたピーチフルーニュという、興味本位で買ってみたジュースを手近くに空いているベンチを探す

だけど自動販売機の近くはもう人で埋まっていて、ちょっと遠くの木の木陰のベンチまで行く

座って一息ついていると気持ちいい風が吹いてきた

とりあえず缶を開けて一口

……

思わず缶を見つめる

甘すぎない？これ

ピーチの匂いはいいんだけどなんか甘すぎる

まあ、買ってきたものはしょうがないから飲んでいると自動販売機のほうに結弦と仲村が見えた

仲いいな、とぼろと眺めていると向こうもこっちに気づいたみたいでジュースを買ってこっちにきた

「よっ、北園。暇そうだな」

「おっしやる通りやるのがなくってね」

そう言つて、二人とも同じベンチに座る

あっ、そういえば

「中野がありがとっつて言ってたわよ」

と、結弦に言うとなんか怪訝な顔をされた

「へ？何のことだ」

何の、と私に言われても
え〜っと

「ウイルス駆除してくれてって、言ってたわね」

「ああ、この間の奴か」

「って、中野の事知らなかったの？」

「竜崎に連れてこられたからな。ほとんど会話しなかったし」

「ふ〜ん」

「それにしてもその中野とか言うの、大丈夫か？」

「なにが？」

今度はこっちが疑問を返す

何が大丈夫か、分からない

「そいつのパソコンのウイルス駆除するときに、一応どんなウイルスかとか色々しゃべったんだ。今回のはちょっと珍しかったから
「珍しいって？」

ちよつと遠くを見つめながら考えて、結弦は口を開く

「中野のパソコンのOSはWindowsなんだけどな、それを駆除しようとするオリジナルを立ち上げてたら、オリジナルにまで感染しようとしてきたから」

え〜っと、それって

「WindowsのウイルスがLinuxOSで動くようにしてたっ
て訳？そんなことできるわけ？」

「できなくはない。だけどそれなりに高度な技術がいるからな。そ

んでそのことを中野に話したんだけどイマイチピンときてなかった
みたいだったから、うちの学生としては少々不安になる話じゃない
か？」

いや、まあ

情報セキュリティの学生からすればそうかもしれないけど他の科
の学生からすれば、そんなもの知った話ではないし

「ま、彼をあまり知らないしね。それに私には関係ないわ」

「そりゃそうだ」

言って、二人でくすくす笑う

「そろそろ時間だよ」

仲村が結弦の袖を引っ張って控えめに言う

自分の携帯で確認するとそろそろ授業が始まる時間だ

「それじゃ、また昼休み」

「ああ、じゃあな」

「ゆり、授業中に寝ないようにね」

「なぜ詩織は知ってるの!？」

「あれ？凶星なの？冗談のつもりだったのに」

「うっ……」

引っかかった……

そんな会話を交わしながら、それぞれの教室に戻るのだった

code 0300..(前書を)

寝過ぎました

とらららららららららら

という事で、お昼休み

いつもはみんなバラバラに昼食をとっているんだけど金曜日だけは食堂に集まることにしている

理由は単純

休みである土日は何をするか話し合うため

4時間目がチャイムがなるより早く終わったのでさっさと席を取るために食堂に来ていた

早く来たこともあって食堂はがらから

券売機でラーメン（選ぶのめんどくさかっただけ）の食券を買って、おばちゃんに渡してしばらく待つ

ちよつとして渡されたラーメンの乗ったおぼんを持って少し離れた席に座るとちよつとチャイムが鳴った

あまり熱すぎるものは苦手だから少し冷ますのも兼ねてケータイをいじりながらみんなを待つことに

なんとなく開いたネットの検索ページに設置してあるニュースにふと目が留まる

そこには『未知のウイルス猛威振るう』という見出しが書かれていたリンクを開いて記事を呼んでみる

『突如発生した未知のコンピュータウイルスの解析にセキュリティ
ー会社各社が苦戦している。』

先週、どこからともなく発生したコンピュータウイルスは感染数を100万に届かせようとしており、セキュリティ会社はこのウイルスに対応するように解析を続けているが、解析できない箇所があるという。

これが原因でなかなかセキュリティに反映できず各社は苦心している』

セキユリティー会社も大変ねえ

読みながらそんな感想を抱いていると、最初に来たのは竜崎だったらしく少し向こうをおぼんを持って歩いてきた

「おす、北園」

「なんだ竜崎か」

「なんだとは何だよ」

「特に意味はないわ」

そんなやり取りをしているとその後が続いてみんな集まってくる

「よお、北園早いな」

「ちよつと授業が早く終わってね」

神池に続いて結弦と詩織もやってきた

「悪い悪い、授業が長引いちまって」

二人が同じテーブルに座つたのを確認してみんな食べ始める

「それで、今週はどうするんだ？」

最初に声をあげたのは竜崎だった

「どうするってたって、結弦のプログラムができなきゃ何にもできないじゃん」

「ふほふほはむふあほふふえふいふあほ」

結弦、飲み込んでからしゃべろうよ

「結弦、何言ってるのかわかんないよ」

私の心の声を詩織が代弁してくれた

code 031: (前書き)

私はマイブームがコロコロ変わることが多いのですが、最近では結弦の持つてるswallowを作ってみようと画策しています

もしかしたら、そのうち公開するかも!?

「そのプログラムならできたぞ」

「なら言えよ。それじゃ今週はそれを見ながら何を作っていくか話し合つか」

「そうね。本体だけできても使えるものがなければ意味がないものね」

「それじゃ明日は結弦の部屋に集合でいいな」

「OK」 「分かった」 「うん」 「それでいいわ」

それで話し合いは終わりみんな食事にもどる

「それはいいけど、竜崎。あまり結弦に厄介ごと押し付けるんじゃないわよ。おかげでさっきのだって遅れたんでしょ？」

「そうだぜ？たまには自分で解決しろよ」

私の言葉に乗っかって神池も文句を言う

「うっ……。わかったよ……。悪いな結弦」

「まあ、いいけどな」

ばつが悪そうに、結弦に謝る竜崎

「とこういうことで罰としてこのから揚げいただきー！」

そう言っって神池が竜崎の前にあるお皿からから揚げをつまんで口に入れる

「あっ！ー！てめえ、俺のから揚げ返せ！」

「昨日ケーブルの先をハブのところに持って行ってもらったろ？今度はその先を全部挿しつけてくれ」

「テキストに挿してけばいいんすよね？」

「なわけあるか」

「あたっ」

先生にたたかれた…

「ちゃんとケーブルの先に挿す場所が書いてあるからそこに挿すんだ」

「へ〜い」

「それが終わったらハブの裏に端末があるから、それを使ってちゃんと通信できてるか確認な」

「了解です」

そう言うと先生はさっさとどこかに行ってしまった

たまには手伝えよ！

なんて面と言えるはずもなく

「…やるか」

ぼくとしても仕方ないから作業を始める

これが結構めんどくさくって

何しろケーブルの数が半端じゃない

20本のケーブルの束が16本、合計320本

適当に挿すだけならすぐ終わりそうだけど、どこにどのケーブルを挿すか指定してあるから挿す場所を探すだけでも一苦労

結果

「やっと終わった」

と、倒れたのは2時間後
俺こつというの苦手なんだけど…

code 032: (前書き)

個人的な理由によって、これから11月までにこの作品を完成させようと思います

そのため投稿間隔を計算して見た結果、2日に一回ペースだと判明しました

で…できるのか、俺？

きつくなったら、また3日ペースに戻すかもしれませんが

とりあえずどうぞ (^-^-)

ただどあまりのんびりはしてられない

ここに来たのが4時過ぎで、2時間たつたから今はもう6時過ぎ
食堂は時間が決まって6時半から8時までやってる

ただどさっさとこの作業を終わらせないと8時までに帰れるか少し
不安だ

手伝いさせられて夕食食べ損ねたなんてまっぴらごめんだ

という事で気合で立ち上がり、ハブの裏の端末のディスプレイの電
源を入れる

ちなみにこのパソコンはネットワークの制御をしている為、24
時間365日動いている

デスクトップからスタート画面を開いてネットワークの設定画面を
開く

1秒置いて、ずらっと通信状況が表示される

とりあえず眺めてみると何箇所か通信ができてないところがあった
その場所を覚えて裏のハブを見に行く

確認するとケーブルを挿し間違えていた

一旦はずしてちゃんとした場所に挿そうとしたら、そこには別のケ
ーブルが挿されていた

それを外して挿しなおして、今度は外したケーブルの場所を探す……
という事を繰り返し続けていたらいつの間にか10分過ぎてた

また裏に回って通信状況を確認する

今度はちゃんと通信してるみたいだ

とりあえず残りの通信できてない箇所を確認してみると……13個
うわ……間違えすぎだろ、俺

それに今のペースでやってたら確実に夕食抜きになる

「……おしつ、やるか!」

気合を入れなおしてもう一度画面に向き直って作業を再開した
…間に合うのか？

そのころ食堂にて

「あれ、神北は？」

「そういえば昨日も見なかったわね」

「おおかたまた誰かの部屋に入り浸ってんじゃないのか？」

「確かに。一番可能性があるな。それより食堂が開くまでどうするんだよ」

「さすがに早く来すぎたわね。トランプあるけど？」

「おっ、大富豪でもやるか。仲村もそれでいいよな」

「私は何でもいいよ」

「それじゃ配るわね」

……和気あいあいとトランプに興じている4人であった

「終わった」

やっとすべてのケーブルを挿し終え椅子にもたれかかる

なんかもう時間を確認したくなかったけど一応携帯を開く

…… 8時25分

予想していたとはいえ現実を突きつけられると軽くショックを受けた
それもあつて椅子から動く気がしない…

椅子でぼーっと、シヨックの立ち直りを待っていたらすぐ横に人の
気配

「神池、まだやってたのか」

松原先生だ

また変なタイミングで現れた

code 033 : (前書き)

「The Defense Network」のホームページ、随
時更新中です

ぜひぜひお越しください

<http://www25.atpages.jp/gamete>
am/TDN/index.php

「ちょっとミスっちゃって。気づいたらこの時間でした……」

「そうか、ご苦労だったな。晚饭まだなんだろう?」

「はい……」

ぐ〜きゅるるうう〜

思わず腹まで反応した

「そうとう腹空かしてるみたいだな。これ買ってきてやったぞ」

そう言って、ビニール袋を投げ渡される

「これ何ですか?」

「やるよ。報酬だ」

「まじっすか!?!ありがとうございます!?!」

さっそく空けてみるとサンドイッチと焼きそばパン、それにコーヒ
ー牛乳が入っていた

そのままサンドイッチを袋から出そうとすると、

「ここは飲食禁止だ」

と、怒られる

仕方がないから袋を持って出口に行こうとしたんだけど、なんか知
らないけど呼び止められた

「神池、このケーブルなんだ?」

「へっ？」

何のことだ？

そう思つてとりあえず先生のいる場所まで行つてみる

視線の先を追つてみると俺が挿していたハブとは別の場所からケーブルが伸びて、スパコン本体とは別の場所に伸びていた

「知らないですけど…、どっか別の端末に繋がってんじゃないですか？」

「そんなはずないんだけどな……」

そう言つて考えこんだ

何か巻き込まれそうな気もしないでもないから、さっさと帰らせてもらおう

「……俺、帰つていいっすか？」

「んっ？ああ、帰つていいぞ。こんな時間まで悪かったな」

「いえ。お疲れ様でした」

そう言つて、さっさと地下を出る

外に出ると春特有の暖かい空気が頬に触れて、それが気持ちよかつた

ブブブツ、ブブブツ

携帯のバイブが鳴る

確認してみると北園からのメール

『明日10時に結弦の部屋に集合ね

遅れたらどうなるか分かつてるわよね？』

お昼のやつね

……というか最後の一文って軽く脅迫だよな
とりあえず帰るか

パタンと携帯をたたんでポケットに入れて夜の学校を寮に向けて歩く
街灯も少ないから薄暗いけど、今日は月明かりがあるからそれほど
暗くなかった

歩いていてふとさっきのことを思い出した

変なところにケーブルが延びているからどこか別の場所で操作でき
るように伸ばしてんのかと思ってたけど、先生も知らなかった

……もしかして誰かが勝手に使ったためにどっかにケーブルをひいて
んのか？

まあ、そんな勘ぐりしても何にも何ないし、そもそも俺には関係な
いし

ごそごそとビニール袋からサンドイッチを取り出して袋を開ける

一口かじると卵とマヨネーズの酸っぱさが口の中に広がった
はあく、とため息をつく

なんか疲れた、さっさと帰って寝よ

そのため息は月明かりの中で消えていった

code 034 : 04/10 (前書き)

結弦が使ってたswallow
現在鋭意製作中!!

土曜日

今日は休みの日だから朝寝坊をして、ちょっと遅めの朝食をとるために食堂に来ている

ちなみに今は9時ちょっと前

さすがにこの時間だと朝食をとりに来てる人は少なくて、食堂全体ががらんとしてる

そんな中でトーストとジャム、刻んだ果物と牛乳を載せたトレイの前に、私の特等席でくつろいでいた

大きなガラス張りの窓から、まだそんなに強くない太陽の光がぼかぼかして気持ちいい

窓越しに見える木が太陽に照らされて綺麗だ

このひと時が私の最近のちょっとしたマイブームだったりする

「……………ふう」

最後に牛乳を飲んで一息つく

落ち着いたところで携帯を取り出してメールを確認してみたけどなにも着信はなし

暇だしちよっとニュースでも見てみようかな、と思ってニュースサイトブラウザで立ち上げる

ずらっと並んだ見出しを流し読みしていたら、あるところで目がとまる

『ウイルスの猛威、収まらず』

なんとなく興味をもったからリンクを開いてみる

「先週、突如として発生したコンピュータウイルス「FLU」は拡大の一途をたどっている。セキュリティ会社各社が今も必死で解析を進めているが、完全に解析できていないのが現状だ。その為、セキュリティソフトでの検知率は低く、拡大の歯止めには程遠い。」

「FLU」って何か聞き覚えが……あつ

「結弦が捕まえたウイルスの名まえって確かこんな名前だったよな……」

ブラウザを閉じて私の仮想PCのデスクトップ画面を携帯の画面に表示する

そこから結弦にもらったウイルスのファイルを呼び出す

「やっぱり同じだ。もう拡散しちゃってたんだ……」

まあ、当たり前か
一度インターネットに流しちゃうと、ものすごい勢いで拡散しちゃうのがウイルスだ

それに、複数のコンピュータに一度に感染しようとするからウイルスそのものを駆除するのは不可能

だから結弦が捕まえた時点でもう拡散していたんだ

それはいいんだけど、セキュリティ会社がウイルスの検知に手間取ってるのが意外だ

だって、解析できないところがあっても、他の解析できたところを目印にして捕まえちゃえばいいんだから
なんでそれしないのかな？

まあ、いつか

後で調べてみよう

ちらつと時刻表示を見てみると9時45分ちよつと過ぎ

そろそろ結弦の部屋に行こうかな、と思ってるとう電話がかかってきた
相手を見てみると、ゆりからだった

code 035 : (前書き)

北園の楽しみは神池いじりのようです(笑)

「もしもし?」

『もしもし、詩織?今何してるの?』

「朝ごはん食べてたけど」

『そうなの?それで、これから結弦のところに行くじゃない。一緒に行かない?』

「いいよ。どこに行けばいい?」

『女子寮の靴箱。私もこれから行くから』

「わかった」

そう言つて通話を切る

携帯をポケットに入れておぼんを返し、食堂を出る

太陽がだいぶ高く上っているけど、まだ春の始めのせいかなそんなに暑くない

時折吹く春風が気持ちいいぐらいだ

そのままのんびりと歩いていると、そのうち女子寮の入り口が見えてきた

ちよつと目を凝らして見てみたけど、見える限りにはゆりはいなさそうだった

入り口のところで立って待ってみる

そんなに待たずにゆりが小走りでやってきた

「ごめん、待った?」

「ううん、行こう」

そうして二人で結弦の部屋へと向かった

池は知らね〜」

竜崎はしょうがないわね、先生に呼び出されたんだから問題は神池か、せつかく警告してあげたのにさてと、何をしてあげようかしら？

なんて無機質な天井を眺めながら考えていたら部屋の扉が開く音してみると、走って来たのか膝に手をついて息を切らしてる神池がいた

ちなみに今は10時ジャスト

……せつかくどうやって懲らしめようか考えてたのに

「ハア…ハア…間に合ったよな…？」

「大丈夫。時間ぴったりだよ」

扉の入り口でまだ息を整えている神池に水を持っていく詩織

「なんであと5分遅く来なかったのよ。私の楽しみを奪って楽しいの？」

「それを回避するために急いできたんだけどな…」

「それじゃ私がつまらないじゃない」

「俺はお前のおもちゃじゃねえぞ!？」

やっと息が整ったのか扉を閉めて、こっちに歩いてくる

……ちよつと睨みながら

「まったく、冗談よ」

「お前のその発言は冗談に聞こえないから!」

水を飲み干して神池が抗議した

code 036 : (前書き)

朝は忙しくって投稿できなかったなので夕方に投稿です
ではどうござい

「それで、竜崎はどれくらいでくるの？」

「おいこら！俺の抗議を無視するな！！」

神池の抗議は一切無視させてもらおう

「そんなかからないと思うぞ？何かもらってくるだけらしいから
「ふん」

結弦の言葉を聴きながら部屋の隅に追いやられたように見える本棚に行く

部屋がサーバーやら何やらでかなりの部分を占めてるから本棚の肩身が狭く見える

かわいそうな本棚に収められている本はプログラムやサーバー構築の専門書と言ったものから、漫画雑誌や単行本、小説まで結構色々そろってる

たぶんここで3日くらいは暇せずに過ごせる気がする

結弦よくこんなにお金あったわね

なんて思いながら適当に漫画を手にとって

ベッドに戻って読み始める

途中ふと神池のことを思い出して気づかれないようにちらっと横目で見ると、あきらめたのか本棚からとってきた漫画を読んでいた
あきらめるの早いわね

まあ、いつか

そして何となく詩織を見てみると……あれ？

結弦と同じゲーム機を持って、二人仲良くなにやらゲームしていた
でも詩織ってあんなゲーム機持ってたっけ？

よく結弦と竜崎がやってるのは見たことあるけど

……あつ、そういうことね

「詩織もよくやるわね」

「ふえ？」

突然話しかけたから変な声で返してきた詩織

なんか怪訝な表情でこっちを見ている結弦の目の前で、詩織の耳元で囁く

「結弦と遊ぶためだけに買ったんでしょ？それ」

「はえ！？あつ……えつ、違うよ……！？これは……そう！テレビ見てて面白そうだなって……！」

「まあ、そういうことにしときますか」

顔を真っ赤にして慌てて否定する詩織

まったく素直じゃないんだから

このまま横槍いれてても楽しいけど、それじゃあさすがに詩織がかわいそうだから部外者は引くとしますか

そうして再び漫画の世界に没頭していると、突然扉が開く音が

「悪い、遅くなった」

何かプリントらしき物を片手に竜崎が部屋に入ってきた

「遅い！遅れたんだから罰ゲームだ！」

そう言いながらどこにそんなものがあつたかは知らないけど、巨大ハリセンを持った神池が竜崎に襲い掛かる

「おわ、あぶね！？つて、やめろ……！」

「問答無用!!」

二人がどたばたと暴れまわる、狭い室内で
だから私は、

「うりゃ」

「!?!?うぎゃ!?!」

神池が目の前を通り過ぎる瞬間、足をひっかけてやった
そのまま目の前の本棚に突っ込む
そして

「うわああ!?!」

本棚が傾き、中に収められていた本が次々と落ちてきて、最後に本
棚そのものが倒れて下敷きになった神池

まあ、自業自得だしほっとけばいいか

ということでもみんな揃ったんだしどんなものができたか見てみまし
ょうか

本棚の下でもがいてる神池は放置して結弦に聞いてみる

code 037:

「それでどんなのになったのよ？」

今日集まった本来の目的はそれのはずだけど？

「そつだ、忘れてた」

そう言つてモニターがずらつと並んでいる机の横にある、一般的なデスクトップパソコンの前に座る

……集まった目的を忘れないでよ
なんて思つてるうちにキーボードを打つて操作を始める結弦

「とりあえずこれがベースのシステムが動いてるところな」

出てきたのは、黒い背景に白い文字とカーソルが点滅しているコンソール画面

動いてるところって言われても、ただ文字が上から下に流れて行つてるだけなんだけど

「これで分かれて言われても無理があるんだけど？」

「やっぱり？」

やっぱりつて…

分かつてんなら最初からやらないでよ

そんな会話をしてたら詩織と竜崎もこっちに気づいたみたいで寄つてくる

……下敷きになつてる神池を除いて

「そついやどんなのになつたんだ？」
「これが動いてるところらしいわよ」

私と同じ事を言いながらディスプレイを覗き込む竜崎にそう言っ
てあげる

「って言われても。流れてる文字が早すぎるし。これでどうやって
分かれと？」

「でしょ？こんなの誰も分かるわけ」

「これってJavaで作ってるよね？なんかJavaっぽい変数と
か出力が見えたけど」

「……ここに分かる人間がいるの忘れてたわ」
「？」

私のぼやきに頭にクエスチョンマークを浮かべながら首をかしげる
詩織

そうだった

詩織は剣道やってたから動体視力が良いらしいし、そもそもいつも
これぐらいの速度で流れるコードを見てるんだった

「は〜」

なんだか詩織が人間離れしてるだけなんだけど、目の前でそんな芸
当見せ付けられると何かへこむ
まっ、仕方ない

「というわけで結弦。詩織の疑問への解答をどうぞ」

「ああ、その通り。Javaで作った」

やっぱり詩織ってすごい、見事に当たってる

ちなみにJavaって言うのはプログラム言語のこと、コーヒージ

やないわよ

このJava言語っていうのは他のプログラムとちょっと違って、
どんなハードウェアでも動くように作られている

だからパソコンだけじゃなくて携帯電話なんかでも使われている
有名なところではちょっと前に話題になったスマートフォンに使わ
れていた『Android』のアプリもこれで作られている

code 038 : (前書き)

こんなプログラムを作りたいです

code 038 :

「このコンソール画面に表示してんのは、定期的に集めてくるOSの情報やら設定やらだから実は表示する必要はないんだよね。デバッグ用に表示させてただけだし」

コンソールを閉じながら結弦が言う
というか、さっきのコンソール画面を使えって言われても詩織ぐらいしか使えないし

「それからこっちが本体プログラム」

そう言っつて、また結弦がキーボードを操作しはじめた
次に表示されたのはウインドウの中にテキストボックスやボタンがいくつか配置されているもの

「ここのリストボックスに作ったプログラムのソースコードを入れてやると、勝手にコンパイルしてリスト化する」

そう言っつて、ドラッグしていたファイルをリストボックスにドロップする

数秒たつと画面に『OK』と書かれたウインドウが表示されて、その後リストボックスにファイルが追加された

「それからエラーがあるプログラムをドロップすると……」

今度は別のファイルをリストボックスにドロップした
同じようにウインドウが表示された

されたんだけど……

「なんでエラーが出てきたときの表示が『直しやがれ!』の一言なのよ……」

「竜崎がやれやれうるさくって」

「あんたが原因か」

「うお!?!や…やめる!くるしい……」

お仕置きに竜崎の首を絞めてやる

「だ…だって、その方が面白いだろ…?」

「おもしろくないから!逆に腹立つただけだから!」

「うお!?!ごめんなさい!?!もうしません!?!」

さすがに顔が青ざめてきたから離してやる

「げほつごほつ……、北園容赦なさ過ぎるぞ」

「自業自得よ。それで今の機能はこれだけ?」

「いや。一応もうひとつ」

カチャカチャとキーボードを操作する音

その直後、エディタが画面に現れる

「これで登録したプログラムの条件起動とかを編集するようにした」
「どういふこと?」

私が聞くと、何かのファイルをそのエディタで開く
出てきたのは……プログラム?

「たとえばここに『Run file』testfile』
IP ping=true』って書いて実行する。すると」

「すると?」

「指定したIPアドレスと接続できたらこの『testfile』

っていうプログラムを実行する。こんな感じでいろいろ編集できる」

「へへ。それじゃあ、これから俺たちがこのプログラムを作ればいいのか?」

いつの間にか復活して画面を覗き込んでいる竜崎の質問

「そう。単純なプログラムを片っ端から作っていけば、それを組み合わせて複雑なプログラムが簡単に作れるって訳」

「関数みたいなものだね」

私の隣で画面を眺めていた詩織がつぶやく

「関数っていうと…C言語みたいなあんな感じ?」

私の疑問にひとつつなずいてから詩織が話し出す

「C言語には関数って概念があって、処理をまとめることができる。まとめることで同じ処理をするときに、何回も同じような長いコードを書かなくてもいいようになってるの」

「そのプログラム版だなこれは」

詩織の説明にそう結弦がまとめる

「ふ〜ん。便利なものがあるのね」

素直に感心してしまう

結構この構造って使えるのかも

「この本体のプログラムは俺のサーバにアクセスして操作できるよ
うにしとくから、とりあえず作ったらやってみてくれ」

「OK」

「わかったわ」

「うん」

ひと段落したみたいだから、三者三様の返事をして、ディスプレイからみんな離れる

竜崎はベッドに、詩織は結弦の横の椅子に

私は喉が渴いたから結弦に断って彼の冷蔵庫からお茶を取り出して、部屋に備え付けられている簡単な台所に行く

ピピピピピッ、ピピピピピッ

のどを潤していると部屋のほうからアラームみたいな音が聞こえてきた

それと一緒にどたどたと、たぶんアラームの発生源に駆け寄る足音もする

なにかあったのかしら？

／／

ピピピピピッ、ピピピピピッ

いきなり鳴ったアラーム音に一瞬ビクッと驚いてしまう

ちょうど作ったプログラムの説明がひと段落して、それぞれ思い思いの場所に散った直後だった

アラームの発生源の、サーバの端末に行こうと、立ち上がって振り向く

巨大なサーバの箱の横にポツンと備え付けてあるディスプレイとキーボード、マウス一式の前には、いつの間にか仲村がいた

……いま俺の横に座ってたよな？

本気で瞬間移動を疑うほど一瞬で移動していた仲村のもとに近づき、ディスプレイを覗き込みながら聞いてみる

「何のアラームだ？」

「IPを監視していたでしょ？そのIPが繋がったらアラーム鳴るようにしてたの」

「でも部屋にいなかったときはどうしたんだ？」

その時、俺の真つ黒な携帯が鳴った

開けてみるとメールが一件

タイトルが『接続を確認』……ってもしかして

「繋がったら携帯にメールが行くようにしといたの」

猛スピードでキーボードを打ちながら仲村が言う

「いつのまに。それで、今はどういう状況だ？」

画面を見てもコンソールが出てきては消えの繰り返しでよく分からない

code 039 : (後書き)

今回出てきたプログラム、次いつ登場させるか：未定です

こんなの作りたいな

code 040:

「今はそのパソコンに侵入にしようとしてる………できた」

そうやって画面にウィンドウが出てきて、そこにデスクトップ画面が表示される

「これがあのパソコンの画面なのか？」

「うん。画面だけをこっちに送るようプログラム送ったから、これで監視できる」

「この画面の記録ってできないのか？」

俺がそういうと、またキーボードを叩く
するとウィンドウの右上に『REC』と、赤い文字が表示された

「今から記録をはじめたよ」

「分かった。そんじゃ、見てみるか」

ウィンドウを最大化して眺めてみる

ちょうどプログラム中だったのかエディタを開いていた

書いてある構文を見てみると………たぶんC言語だ

あとでどんな物か見てみるか

なんて考えていると、台所の方から

「なにしてるの？」

という言葉とともに西園が手をハンカチで拭きながら戻ってくる

「始業式の日の昼に、例によって竜崎の厄介ごとを片付けてたんだ

けど、」

と、そこまで画面を見ながら説明をしていると、後ろで『ひっ！』
という小さな悲鳴

振り返ってみると、西園の目がキラーンと光って竜崎をにらんでいた

「また性懲りもなく押し付けてたのね？」

とは、北園の言葉

「分かりました。自分で解決するよう努力します……」

北園の迫力に押されて、竜崎は小さくなって答えるしかなかったよ
うだ

と、それはいいとして

また黒フレームの画面に目を戻して説明を続ける

「その時の厄介ごとがウイルス駆除だったんだけど、その時に駆除
したウイルスに興味もってな。仲村にそのウイルスの発生源を調べ
てもらってたんだ」

「へ〜。ちなみにそのウイルスの名前は？」

「英語で『FLU』って書いてた。インフルエンザって意味らしい」

「『FLU』…、って今世間で流行してるウイルスじゃない？」

「あ〜…。なんか聞いたことあるな」

そういえばWEBニュースか掲示板でチラッと、ウイルスが大流行
してセキュリティ会社が苦戦してるって話を聞いたことがある

「なんでもウイルスのコードを解析しても、解析できない部分があ
って、それにどこもつまずいちゃってるみたいよ？」

「あっ、その話なら私も今朝ニュースで読んだよ」

北園の話に仲村が入ってくる

code 041 : (前書き)

お待たせしました

「朝のWEBニュースにもそんな記事があつて、気になったから結弦が解析したデータをちよつと見てみたの」
「どつだつたの？」

北園が興味津々といった顔で仲村に聞く

「ちよつと特長とかを眺めてみたけど、やっぱり同じウイルスだと思つ」
「ふん。それで発生源は分かつたの？」
「この学校」
「へっ？」

俺の言葉に驚いて目をぱちくりさせる北園

「プロキシはこの学校だから、この学校からウイルスが出たつて事になる」
「確かにそうなるわね…。どのパソコンから出たとかは分かつてないの？」
「IPアドレスは分かつただけど、どのパソコンにも割り当てられてなくて。それで仲村にそのIPアドレスの監視をしてもらつたんだ」
「なるほど。さっきのアラームはその音だつたわけね」

俺の説明にどうやら納得したらしく、少しうつむきに考え込みながら一人でうんうんうなずいている
と思つたらいきなり顔をこっちに向けて確認するように聞いてくる

「アラームが鳴ったってことはそのIPアドレスは今繋がってるの？」
「うん、そうだけど」

仲村のその言葉を聞いた北園は心底意地の悪そうな笑みを浮かべてこう言った

「その犯人を捕まえるわよ」

「はい？」

「えっ？」

突然の発言に思わず仲村と二人して聞き返してしまった
だって本当に突然だし

「どうして？」

率直な質問をぶつけてみる
すると、北園はニッコつと笑った後

「面白そうだからよ」

と、一言

「……えーと、それだけ？」

「それだけ」

「……」

思わず仲村と目を合わせてしまう

だって……西園がウィルスの作者を捕まえるなんて言うとは思わな

かつたんだから

しかも「面白そうだから」という理由で

まあ、犯人は突き止めるつもりだったんだけど
しょうがない

「分かったよ。もともと犯人は突き止めるつもりだったし」

「話が分かるじゃない。それじゃ、さっそく始めましょ」

俺たちの後ろからものすごく楽しそうな顔でディスプレイを覗き込
む北園

まあ、いいんだけど

「それじゃやるか。仲村、あのパソコンの経由してるサーバ分かる
か？」

「ちよつと待って」

仲村がそういいながらコンソールにコマンドを入力する

それから数秒

ディスプレイにウィンドウが表示される

そこにはIPアドレスがずらっと並んでいる

「これがIPで……、こっちがサーバのアドレス」

続けざまにもうひとつウィンドウが横に出てくる

code 042 : (前書き)

台風がすごいですけど皆さん大丈夫ですか？
風で飛びそうなものは家に入れて、台風が過ぎるのを待ちましょう

code 042:

経由したサーバのアドレスと仲村が持っているアドレス表を突き合わせながら辿ってみる

まず最初に、ここから送信されたデータは学校全体のネットワークを管理しているサーバに送られていた

そこを経由したデータは「FUJISHIRO」自体を管理しているサーバから、仮想ネットワーク内の犯人のパソコンに送られたらしい

「……フジシロを管理しているサーバを探れば分かりそうだな」

「そうだね。ちょっと待って、今このサーバの情報を集めるから」

そう言っただけでまたキーボードを叩く仲村

画面に色々なコンソールが出ては消えての繰り返し

それを眺めながら考える

犯人のパソコンへ最後にデータが経由したサーバは、フジシロを管理している

フジシロを構成しているコンピュータはそれぞれ、サーバにケーブルで繋がっている

つまりフジシロが作っている仮想ネットワークに繋がるということは必ずそのサーバにケーブルで繋がっていることになる

あっ、そうだ忘れてた

授業で使っている実習室内にある端末も仮想ネットワークに繋がるか
らこれもサーバに接続されてる

つまりこのサーバに直接繋がっているコンピュータのどれかが犯人
が使っているパソコンになるはずだ

でもこれだけじゃ、どれが犯人のパソコンか分からない
さて、どうするか

直接行って見てみるしかないか

「北園、フジシロの管理サーバってどこに設置してるんだっけ？」

俺の斜め上で仲村のキーボード捌きを眺めている北園に聞いてみる

「えっ？えくと、確か実習室の地下になかったっけ？」

天井を見上げながらつぶやくように答える北園

「そこって確か実習室の入り口と正反対の場所に入り口があったよな」

「そういえばそうね。……結弦、なに考えてんの？」

天井から俺に目線を移して不思議そうな顔で聞いてくる

「俺の予想じゃそこに犯人がいるかもしれない」

「どっついうこと？」

さらに不思議そうな顔をしている北園に、ひとつ息を吐いて考えている仮説を言う

「うちのフジシロって、管理サーバに全部のケーブルが繋がってるだろ？授業をしてる端末とか。フジシロが作ってる仮想ネットワークに繋がるものすべて」

「そうだけど……、それがどうかしたの？」

「犯人があのだ仮想ネットワーク……つまり管理サーバに直接パソコンを繋げてるんだっけたらサーバにケーブルが繋がってるはずだ。犯人はたぶんサーバに直接ケーブルを繋げてウイルスを流してる。だからそのケーブルをたどってけばそこに犯人がいるはずだ」

「あっ、そっついでとね」

俺の言いたいことが分かったらしい

code 043 : (前書き)

結弦くんは身体が固いようです

「でもケーブルって何百もあるでしょ？どうやって探すのよ」
「それが問題なんだよ。一つ一つどこに繋がってるのなんか確認してたら時間がいくらあっても足りないし」

言いながら椅子の背もたれに体重を預ける
ギイツという椅子の軋みを聞きながら天井に視線をさまよわせ考える
けどいくら考えても全然いい案が思いつかない
そのままぼくっと考えていたら、今までリズムよく叩かれていたキーボードの音が途中で止まった

「情報を一通り集めたよ」
「おう、サンキュ」

仲村は俺にそう言うと、手を組んで腕を背中のように伸ばし始めた
体柔らかいな
俺もやってみようつと
手を後ろに組んで
ぐうぐうつ

やべえ、組んだ腕が全然あがらねえ
そんなことをしたら北園に「体硬いわね」って馬鹿にされた
何か悔しいから目いっぱい腕を上げ続けていたら

「痛え！！」

う、腕つった……

斜め上からくすくす忍び笑いが聞こえるし
くそつ、今日から風呂上りにストレッチして体柔らかくしてやる！

……と、それは置いて

「とりあえず何かないか探してみるか……」

まだ痛む腕を我慢しながら仲村の前からキーボードを持つてくる
ひとつ息をついてからキーボードを叩く

仲村が集めてくれたデータを一覧にして画面いっぱいに表示する

「なんか役に立つものないかな」

適当にスクロールしてみるも、特に見つからない
ホントにどうすっかな

「やっぱり行つて見てみるしかないかな。ケーブルが変なところに延びてたら簡単に見つかるのに」

ディスプレイをぼくと見つめながらつぶやくと

「そんな都合よく行くわけないでしょ」

という北園のもっともな突込みが聞こえてくる

「変なところにケーブルが延びてたぞ」

という声まで聞こえ　　つて!?

「今なんていった!？」

声のしたほうに振り向く

だけどそこには人影がなく、壁だけがある

その手前には倒れた本棚しかない

「フジシロとは別の場所にケーブルが延びてるのを昨日見たけど」

「「「本棚がしゃべった!?」「」」

俺と仲村、北園の声がかぶった

その声に

「本棚の下敷きになってんだよ!!早く助ける!!」

という声が返ってきた

つてこの声……

「神池?なんでそんなところで潰れてんだ?」

「……さっき北園に潰された」

「失礼ね。私がちょっと足出したらあんたが勝手に突っ込んで行っただけでしょ」

「それが原因だからね!?!」

まあ、北園の神池に対する扱いはいつものことだから良いとして

「それでさっきの話、マジ?」

「マジだから早く助けてくれませんか?」

……なんか可哀そうになったから、とりあえず本棚をもとに戻してやっ

code 044 : (前書き)

居残りで手伝いさせられていたのが役に立ったようです

code 044:

「サンキュ……。やっと出れた」

何だかゾンビみたいに床を這いながらベッドに突っ伏す神池

「だいじょぶか？」

「なんとか……。それでさっきの話なんだけど」

気だるそうにその場にベッドに座って話し出す

俺もさっきまで座ってた椅子を持ってきて跨ぐように座る

「フジシロのサーバって地下にあるだろ？そんで本体のコンピュータは1階で」

「ああ」

確か実習室はそんな構造をしていたはずだ

この学校に入学したときに配られたパンフレットか何かに書いてあった気がする

「コンピュータから延びてるケーブルをサーバに挿す作業をやらされてた時に、サーバとは別の場所に延びてってるケーブルがあったんだ」

「そのケーブルが何に繋がってるか見たか？」

そう俺が聞くと、少し長めの金髪を揺らしながら

「いや、あまり気にしてなかったから確認してない」

と首を横に振る神池

……でもこれは確認する価値はあるかなんて考えていると後ろから神池に質問する声が聞こえた

「神池くん、そのケーブルって入り口からサーバのほうを向いてどつちに延びてた？」

「へっ？え〜っと、たしか左の方に伸びてた気が……」

「じゃあ、こっこのほうかな？ありがと、神池くん」

なんだ？と思つて振り返ると、また何やらキーボードをすごい勢いで叩いている仲村

キーを叩くたびに後ろに結んだポニーテールの髪が揺れている

その向こうで光っているディスプレイを遠目から見ると……何かの地図か？あれは

「仲村、何調べてんだ？」

「実習室の地下の設計図」

やっぱりキーボードを叩きながら目を画面から離さずに答える

なるほど設計図見れば大体の場所の検討はつくはず

そう思つて俺も、仲村の横からディスプレイを覗きながら、さっきの仲村と神池の会話を思い出す

……入り口からサーバを向いて左に延びてんだよな目で辿つてみると行き着いたのは電気室

「確かにここに犯人いたら分らないな」

「ここは完全に個室になつてるからね」

フジシロのコンピュータが設置されている1階の床はほとんどがグレーチングになっている

上から吹き出た冷気を地下室に逃がし換気をよくして、効率よくコンピュータを冷やすためだ

だから地下で変なことをしようものならたちまち見つかってしまうでも電気室の上にはグレーチングもないし壁で仕切られているから直接行って確認しないと分からない

code 045:

……ここにいっても仕方ないか
とりあえず電気室に行ってみよう

「仲村。まだ犯人のパソコンは繋がってるか？」

犯人がいないのに行っても意味無いから、行く前に一応確認

「え〜と……、まだ繋がってるみたい」

「そか。じゃあ犯人に逃げられないうちに行ってみるか」

立ち上がりながら机の上の無接点充電パッドの上に置かれた携帯を
ポケットに無造作に突っ込む

「それじゃ私も行く」

そう言いながら、腕を組んで伸びををする北園
そんな俺たちを見て

「がんばれよ〜」

「応援してるぜ〜」

ベッドでくつろぎながら漫画に目を落としてひらひらと手を振る二人
こいつら、はなから行く気はないらしい
そんな二人のところに北園が歩み寄る

「あんたは行くのよ」

そう言っつて猫みたいに首根っこを捕まれたのは竜崎

「……………なんで俺？」

めんどくさそうな顔で抗議している

「あんたいつつも結弦に助けてもらってるんだから、たまには手伝いなさいよ。それに今は神池が使い物にならないんだし」

そんな竜崎に手を腰に当てて肩をすくめながら答える

神池を見てみるとベッドの上でぐったりと……………漫画読んでた

「でも俺まで行く必要がある？」

なおも食い下がる竜崎

「だって犯人捕まえるのに結弦一人じゃ大変でしょ」

「お前がいるじゃん」

「こんなか弱い女の子にそんなことさせるつもり？」

「か弱い女の子？」

「……………なんか文句ある？」

「いえ、無いです」

勝負あり

最後は北園のレーザーのような視線に屈服したようだ

「それじゃ行きましようか」

北園がそう言いながら部屋を出て行く

……………片手に竜崎を引きずりながら

俺もそれに続いて部屋を出ようとして、不安げにこっちを見つめる
仲村の視線に気づく

「そんなに心配しなくても大丈夫だ仲村、やばくなったら先生を呼ぶしな」

「うん……」

「仲村はここで犯人の監視を頼む。そんで犯人のパソコンの接続が切れたら携帯で連絡をしてくれ」

俺がそう言つと、それまで不安げだった顔から一転、パアツと笑顔になり「うん!!」と返事をする
元気があつてよろしい

「結弦。早く行くわよ」

廊下のほうから北園が叫んでいる

「それじゃ行ってくる」

「いつてらっしやい!」

仲村の声を聞きながらドアをくぐる

そのまま北園と竜崎の下へと小走りで走っていった

code 046 : (前書き)

すいません！

忙しくて中々投稿できなかつたです(汗)

では、どうぞ！

「ちょっと早くしなさいよ！先生に見つかったらめんどくさいってことぐらい分かってんでしょ！」

「分かってるよ！！というかそんな大声出したら見つかるだろうが！」

「……お前ら二人ともうるさいから」

結弦の指摘に思わず口に手を当てそうになって、持っていたノートパソコンを落としそうになる

「あつぶねえ」

「まったく、気をつけなさいよね」

北園がなんか言ってるけどとりあえずスルー

さっさとここ開けないと先生に見つかったらホントにめんどくさいことになる

今俺たちはフジシロの管理サーバが設置されている実習室地下室へ続く扉の鍵を開けるために、ノートパソコン片手に電子ロックと格闘していた

と言ってもカードキー式のロックだから、読み取り部分に結弦が作った磁気装置を使ってパスワード調べてるだけなんだけど

ちなみに調べるためのソフトは仲村特製だ

ホントに結弦も仲村も器用だよな

おっと、そんなことを考えていたらロックが解除したらしいカチャツと音がして扉が開く

「それじゃ行くわよ」

そう言つて音を立てないようにそつと中に入る北園
それに続く結弦

「ちよつと待つてくれよ！」

おいていかれてしまった……

急いで磁気装置をパソコンから引き抜いて、持ってきた黒のカバンにねじ込んで足音を立てないように階段を下りていく
地下室と階段は重そうな鉄の扉で区切られていた

扉の上のほうに小さな装置がついていて赤いLEDが点滅している
たぶんセキュリティーが何かなんだろう

その扉を開けると、中に押し込められていた空気が一気に階段へと流れ出す

「やっぱり寒いな」

地下室に入るとまるで真冬かと思えるほどの冷気が体を包み、ブルツと身震いをしてしまう

寒さに身を縮こませながら、できるだけ壁側を歩いて先に行った二人を探す

……左だったよな

階段から、すごい数のケーブルが繋がったサーバまでは何かの装置がずらつと並んで一直線みたいになっている

だけどサーバの手前で左右に開けて分かれ道になっていた
そこを左に曲がり少し歩くと、巨大な装置の影に隠れて奥を伺っている二人が見えた

その後ろにそつと駆け寄つてしゃがみこむ

「どうなつてんだ？」

「あつち」

「……………」

結弦が指した方向に目を向けると、壁がコンクリートできている
部屋があった

地下室の入り口のところの扉と同様、薄い水色の塗装がされてある
鉄の扉だ

その扉の上には『電気室』と書かれた透明のプレートが壁に貼って
ある

code 047 : (前書き)

少々遅くなりました
ではごじじぞ！

「あの中に犯人がいるのか？」

「たぶんな。まだ仲村から通信が切れたって連絡ないし」

「それじゃあ、しばらく暇だな」

ポケットの上から携帯の存在を確認しながらなんか言ってる結弦別に興味も持たなかったから追求はしない

背中 of 機械にもたれかかると、金属特有の冷たさが背中にじんわりと伝わってきた

とりあえず肩にかけてたカバンを床においてそのまま座ると、ひんやりした空気が体を包んで少し縮こまってしまふ

「寒そうだな？」

「ああ、誰かさんが拉致してくれたおかげで上着も持ってこれなかったからな」

そう言つて、チラッと結弦の横を見る

「何よ、私のせいだつていうの？」

「せめてコートぐらい持ってこさせる。だいたい何でお前らだけジヤンバー着てんだよ！」

薄手のTシャツ一枚の俺に対し、黒いダウンコートを着込んでいる結弦と薄いオレンジのコートを羽織っている北園

「寒いからに決まってるでしょ。風邪ひいたらどうしてくれるのよ」

「じゃあ、俺は!?!」

「馬鹿は風邪引かない」

「お前もか!？」

がつくしと頭を落として、ふかゝいたため息
なんかもう反論するのめんどくさい
ぐー

……気を抜いたら腹減った
さっさと戻って昼飯食べたい

「相変わらず燃費悪いわね」

「……うるせえよ、新人代謝がいいと言え」

呆れ顔でこっちを見てる北園にそう言ってる

あゝ、それにしてもホントに腹減った

なんかカバンに入れてなかったっけ？

カバンの前面にある小物入れ用のポケットを探してみると、なんか
手ごたえがある

とりあえず取り出してみて……何だこれ？

くしゃくしゃになった何かのチケットのようなものが出てきた

開いてしわを伸ばしてみると、どこかのカフェの予約券だった

ただ期限を見てみると1ヶ月前に切れてるから、もうこれ使えないな

そういえば、前俺が気を利かせて『仲村と言つて来い』って渡した
チケットはどうしたんだろう結弦は

「そっぴやこの前おまえに渡したカフェの予約券、ちゃんと仲村に
渡したのか？」

「一応な。誰かと言ってこいって渡した」

「なにそれ!?!あんだ一緒に行くつって言う甲斐性も無いの!?!」

北園の叫び声に、隣の結弦だけじゃなくって俺も両手で耳をふさぐ
ていうか、

「そんな大声出したら犯人にばれるだろ」
「!?!」

しまった! っていう顔で口元をおさえる
だけど電気室のほうを見て、犯人に気づかれてないのを確認すると
小声で結弦に詰め寄りだした

「(あんたそんなんじゃない、そのうち詩織に愛想つかされるわよ!?)」
「(……だって仲村は他の友達と行きたいかも知れないだろ?)」

結弦のその言葉に、はあ~~~~と北園が盛大にため息
俺も結弦のこの答えには頭を抱えるしかない

code 048 : (前書き)

お待たせしました！

「（あんだ分かってないわね。こういうのは好きな人に誘われて行くのが一番うれしいに決まってるでしょ？）」「

「（……そうなのか？）」「

「（いや、俺に聞かれても）」「

なんでそこで俺に振る

「（とにかく！誰かと約束する前にさっさと誘いなさい！いいわね？）」「

北園のその言葉に、ちよつと上を眺めて考える結弦
そして何かを思い出したような顔をしたと思つたら

「（それなら大丈夫だ。仲村と行く約束はもうしてる）」「

なんて言いだした

「（……それって、どっちから言い出したんだ？）」「

「（そんなの詩織からに決まってるでしょ？結弦はこんな何だから）」「

結弦のその言葉を聞いてやっぱりと思つた反面、意外に思う

仲村は普段からおとなしくつて、引つ込み思案で

そんな性格だから俺たちといても滅多と自分からやりたいとか一緒に
行くこうとか言わない

その仲村が自分から誘うなんて、よっぽど結弦と行きたかつたんだな
それなのに、こいつとききたら

「仲村も面倒なやつを気に入ったもんだな」
「ホントそうよね」

思わず両側で二人でうなづく

当の本人は頭に疑問符を浮かべてるし

その様子を見て、また二人でため息をついてしまう

……まあ、いいや

そんなことを考えてたっつてしょうがない

北園もあきらめたのか、それとも興味がなくなったのか、また電気室のほうに視線を戻してる

一人まだ不思議な顔をしてるのがいるけど無視だ無視

さて暇になったぞ、何してようか

そっついや最近ネット小説読んでないな

そう思つてスマートフォンを取り出してインターネットを立ち上げる……つてあれ？

サーバに繋がりませんか？なんでだ？

アンテナ状態は……

「（あつ、圏外）」

「（どうした？）」

俺のつぶやきに頭に浮かべていたハテナマークを消して画面を覗き込む結弦

「（『サーバに繋がりません』、しかも圏外だし。これじゃ繋がるわけないじゃん……つて圏外！？）」

「（うるさい）」1発頭をぱしつと叩いておく

耳元で騒ぐな、うるさいだろ

だけどそんな俺の突込みを無視して携帯を取り出し、『ホントに圏

外だ』とか言いながら電波状況を確認している

「（何をいまさら。ここ地下だしスパコンを設置してる施設なんだから電磁シールドぐらい当たり前だろ）」

スーパーコンピュータやサーバを設置してるような施設は大体、そこからじゆうに飛び交っている電波に干渉しないようにだとか、外からの不正な電波を使ったサーバへの攻撃を防ぐためだとかで電磁シールドと呼ばれる電波を遮断するような仕掛けがある

それが電磁シールドと呼ばれるものだ

ここだってスーパーコンピュータを設置してんだから仕掛けられるだろうし、携帯が圏外になるのも当たり前だ

だけど結弦が慌てていたのはそんなことではなかったらしい

code 049 : (前書き)

最近スランプ気味です…

ストーリーはできてるのになかなか文章にできなくて
それではどうぞ

「（そうじゃない。部屋を出る直前に仲村に犯人のパソコンがネットワークから切断されたら携帯に連絡くれるように言っただけだ……）」

「（えっ？それじゃあ……）」

「（犯人がいなくなっても分からないってこと？）」

3人で固まってしまっ

ちなみにしゃべったのは結弦、俺、北園の順

それぞれしゃべってお互いの顔を見つめて

まず、北園が電気室に向かって走り出し、結弦がその後にく

とりあえず重たいノートパソコンの入ったカバンはその場に置いて、俺もその後ろについていく

数歩遅れて、たどり着いた電気室の中を覗き込むがそこには誰もいなかった

「ちょっと遅かったようね……」

北園が悔しそうにつぶやきながら立ち尽くす

その横を通り結弦が部屋の中に入っていった

たぶん何か手がかりを探しているんだろう、設置されている機械の

周辺を何かを探すようにキョロキョロしている

そんな二人の様子を片目にとらえながら俺はあることを考える

そして、ひとつの結論にたどり着く

「もしかしたらまだ犯人は地下室にいるんじゃないか？」

その言葉に、バツと二人の視線が俺に集まる

「どづいつことだ？」

言いながら結弦がこっちに駆け寄り、北園は俺のほうに向き直る
それを見ながらなんて話すか考えていたけど、その前に確かめないといけないことがある

「ひとつ確認。結弦、仲村には犯人のパソコンがネットワークから切断されたら携帯に連絡するように言ってきたんだよな」

「ああ」

「それでここに来るまで、その連絡はなかった」

「そうだけど、それがどうしたんだ？」

俺の質問に対する肯定の返事を聞いて、まだ犯人はこの地下室にいると確信する

うつむいていた顔を上げて、二人に説明を始める

「まず俺の部屋から地下室の入り口に来るまでに仲村から連絡がなかったことは、少なくとも俺たちが入ってきた時点では、地下室に犯人がいたはずだ」

「そうなるわね」

あごに手を当てて北園がつぶやく

「それで地下室の出入り口はあその階段しかない。ここは奥に行けば色々な装置があって迷路みたいになってるけど、階段付近はあの一本道」

「来たことない場所のことがよく分かるな」

「さっきお前と仲村が地図見てたのを覗き見してたからな」

北園に拉致されるのは薄々感付いていたから、予習してただけさ
それに敵地に入り込むのに、何も情報を集めずに行ってもいいこと
ないしな、敵地じゃないけど

code 050 : (前書き)

すみません

話つくるのに詰まってしまいました……

しばらく3日ペースになるかもしれませぬ……

ではござい……

code 050:

「早く続き話しなさいよ」

「分かってるって」

ちよつと苛立ちが入った北園の声に急かされて続きを話すもたもたしてたら犯人に逃げられるかもしれないしな

「入り口からのびた一本道をまっすぐ行くと今度はハブの前で二手に分かれるだろ？俺たちはその分かれ道のすぐそばで電気室を見張ってたんだ。いくらなんでも反対から誰か人が来たら誰かが気づく一番前で見張りながらしよっちゅう後ろにいる俺たちとしゃべってた北園なら特に」

そう言つて視線を北園に向ける

「私は見てないわよ。見つけたらまずこんな状況になってないでしょ」

そりゃそうだ

でも北園も見えてないんなら、たぶん外には逃げてないはず

「ということだ。犯人はたぶん奥のほうに隠れてると思う。だからこのなかの二人で奥を探す」

「残りの一人はどうするんだ？」

「入り口で見張り。逃げてきたらそいつを捕まえる。言ってみれば探す二人は犯人をおびき出すおとりだな」

「じゃあ、私は奥を探すわ。誰かと取っ組み合いをして組み伏せる自信なんて、これっぽっちもないから」

そういつて迷路みたいになっている装置の奥へと消えていった

「とりあえずハブの前まで行くぞ。ここでたむろしてる間に逃げられたらシャレになんねえからな」

北園が機械の影に隠れて見えなくなってから、ぼくと眺めてる結弦を小突いて歩き出す

「で、俺と竜崎のどっちが見張りに行くんだ？」

「お前格闘技やってたよな？それなら結弦が行ったほうがいいと思う。俺じゃ捕まえる自信ないし」

運動は苦手ってわけじゃないけど、やっぱり犯人を捕まえるんだつたら格闘技の心得があったほうが何かと有利だ

結弦は確か少林寺拳法とかいうのやってたはずだから、俺が犯人と戦うよりましだろ

「いや、やってたけどさ。型とかほとんど覚えてないし、正直あてにされても」

「それでもいいんだよ」

おっと

そんな話しをしてたらいつの間にか目の前に、膨大な数のケーブルがつながった機械が見えてきた

「それじゃ逃げてきたら任せたぞ」

「おう、任された」

言葉を交わして、結弦は入り口に、俺はさっきまでいたのとは反対

方向の道へと向かった
その時

「結弦どこだ！」

階段のほうから結弦の名前を叫びながら誰かが下りてくる
焦りが含まれたその声は神池のものだ

code 051: (前書き)

今回から「ちょっとマメ知識」をバージョンアップしてリニューアルします！

待ってた方、お待たせいたしました！

えっ、待ってない？

そんなことを言わずに！

「なにかあったのか？そんなに急いで」

そんなことを言いながら駆け寄るような足音を響かせている結弦
とりあえず気になるから俺も行ってみよう

そう思って地下室の奥へと向けていた足を180度Uターン、入り
口へ駆けていく

角を曲がると、階段の前で膝に手をつけて荒い息をしている神北と、
その傍らで息が整うのを待っている結弦の姿が見えた

「大丈夫か、お前？」

「ちょ…ちよつと待って……」

そばまで寄って話しかけてみたけどまだせえせえ言ってる
どれだけ走ってきたんだこいつ

しばらく待って、深呼吸をするとようやくしゃべりだした

「仲村からの伝言。『犯人のパソコンの接続が切れた、気を付けて』
だってさ」

「それっていつごろの話だ？」

「えっと…、ここに来るまで走って5分かかったから10分ぐらい
前のことだな」

走って5分!?

ここまで結構な距離あるぞ!?

今俺たちがいるこの実習室のある実習棟の周囲には、スパコンを維
持するための様々な機械や設備が近くにある

だから実習棟の周りにはいろいろ建物が立ち並んで、俺たちの部屋

がある寮は少し離れた場所にある

ちなみに寮からここまで普通に歩いて15分か20分ぐらい

その距離を5分で走るとか、こいつやっぱ体力バカだ

まあ、そのことはいいや

10分前に接続が切れたって神北は言った

その10分前俺たちは何をしていたか思い出す

……仲良く結弦を質問攻めにしてたじゃん

絶対その時に逃げられたよ、何やってんだ俺たち…

自分たちのバカさ加減に思わず頭を抱えてしまう

こういうのを後の祭りっていうんだろな

「まあ、いいや。神池、お前も犯人あぶりだすの手伝ってくれ」

「んっ？何するんだ？」

「ここに来たことあるんだったら知ってるだろ？この奥が迷路みたいになってんの」

「いや、知らねーけど」

「あっそう。それは置いて、その中に犯人が多分潜んでんだ。

そいつを探し出す」

「OK、それじゃさっそく行くか？」

「あっ、そういえば仲村は？」

歩き出そうとした神北に、結弦があわてて声をかける

「ん〜と。なんかやってからこっちに来るって言うってたから、もうちょっとしたら来るだろ」

そんな結弦に、思い出すようにグレーチングの天井を眺めながら答えている神北

それを何気なく眺めていて、ふと上から人の気配がした

code 051 : (後書き)

ちよつとマメ知識 リターンズ

結弦「ということでは何か始まったけど、何で俺たちがこんなことやってんだ？」

仲村「作者が言うには『再開したんだから今まで通りじゃ面白くない。そうだ、登場人物に語らせよう！』っていう思い付きらしいよ？」

結弦「なんて迷惑な……」

仲村「そんなこと言わないの」

結弦「仕方ない、いっちょやってやるか」

仲村「そうだね」

結弦「とは言ったものの、何を説明すればいいんだ？」

仲村「えっと、これによれば……」

結弦「んっ？なんだ？その紙」

仲村「ここに来る前に作者に渡されたの」

結弦「だから来るのが遅かったのか。納得」

仲村「それで今日のテーマは『Linuxについて』だって」

結弦「なんでまた。前に作者が説明しなかったっけ？」

仲村「あつ、下に理由も書いてある」

結弦「どれどれ……『作者の気分』ってこれだけ！？」

仲村「すごく適当な理由だね……」

結弦「なんか先行きが思いやられる気がするけど……始めるか」

仲村「それじゃあ、Linuxの歴史から説明するね。」

Linuxは1991年、フィンランドの『リーナス・トーバルズ』って人が作ったものなの」

結弦「俺たちが生まれた年か」

仲村「そうだね。説明を続けるよ？」

大学生だったリーナスさんは当時普及してきたパソコンを使ってUnixと互換性をもつOSを作ろうとしたの。それが今のLinuxになったの」

結弦「ようはUnixみたいなOSを作りたかったってことだな」

仲村「そうだね。ちなみにLinuxっていうのは正確にはOSの心臓部であるカーネルっていうものなんだけど、一般的には、Linuxって言ったらUbuntuやFedoraみたいなもののことを言うの」

結弦「んっ？LinuxとUbuntuとかって何が違うんだ？」

仲村「Linuxはカーネルのことって言ったでしょ？実をいうとカーネルだけじゃOSとして動かないの。カーネルと一緒にウィンドウを表示するソフトとかいろいろなソフトと組み合わせて、初めてOSとして機能するの」

結弦「ふ〜ん。それじゃあ、その組み合わせるソフトを変えたら外觀とか変わるのか？」

仲村「うん。Windowsと違って細かいところまで変えられるから、自分オリジナルのOSも簡単に作れるよ。ちなみにLinuxを組み込んでいるOSのことをLinuxディストリビューションって一般じゃ言ってるよ」

結弦「でもLinuxって難しくないのか？なんかコマンドを覚えなきゃいけないとか聞いたことあるけど」

仲村「大丈夫。昔はコマンドを覚えたほうがよかったことも多かったけど、最近はほとんどWindowsと同じように簡単に使えるようになってるから」

結弦「へ〜、便利なもんだな。でも高いんじゃないのか？」

仲村「Linuxは基本的に無料なんだよ。インターネット上でコミュニティっていう集まりがあって、そこでみんなボランティアで開発してるの。中には有料のものもあるけどほとんどのものは、ホームページに行けば無料でダウンロードできるよ」

結弦「ところで、ディストリビューションっていろいろあるんだろ？どんなものを使えばいいんだ？」

仲村「有名なものとUbuntuやDebian/Linux、Fedora。日本人が開発しているVine Linuxとかがあるね。他にもPuppy Linux、Tiny Coreとかいろいろ開発されてるよ。基本的には自分が気に入ったものを選べばいいけど……私の勧めはUbuntuかな」

結弦「その理由は？」

仲村「最新のソフトが使われていて動作が安定してる、何より初心者にも使いやすいようにできてるの」

結弦「へ〜。そういえば仲村は使ってないのか？」

仲村「使ってるよ。私のはDebianをベースにしてるの」

結弦「なんでDebian？」

仲村「Debianで使えるフリーソフトが他のディストリビューションより断然多いの。それに開発の歴史もすっごく長いからインターネットに情報がたくさん載ってて使いやすいからね」

結弦「いろいろ特徴があるんだな」

仲村「……というか、さつきから知らないふりして質問ばかりしてるけど結弦はりばり使ってたよね？」

結弦「気のせいだ」

仲村「……まあいいや」

結弦「ということでLinuxに興味をもったならチャレンジしてみるのも面白いんじゃないか、という話だ」

仲村「まとめ方下手だね」

結弦「うるせー」

仲村「それじゃ、今日はこのぐらいにしようか？」

結弦「そうだな。あとはこれを見てる人の興味と努力次第だ。まあ、がんばれ」

仲村「それじゃまた次回〜！」

code 052 : (前書き)

神池は迷路に迷ったようです

「まずい！隠れる！」

「??、やべ!？」

「なんだ？」

結弦は俺の言いたいことが分かったらしく、急いでグレーチングから死角になるところまで走っていった

ただ問題は金髪の体力バカ

俺の言いたいことがいまいち分かってなかったらしく、頭にクエスチョンを浮かべて突っ立っている
そんな体力バカを

「いいから隠れる」

「うぎゃ!？」

死角になる場所に思い切り押し飛ばしてやった

その勢いのまま俺も影に滑り込む

『誰かいるのか?』

俺たちがいた場所の真上のグレーチングから声が降ってくる

とりあえず音を出さないように気を付けながらしばらく隠れている

『……………?気のせいかな』

その声を最後に足音は遠ざかっていき、やがて聞こえなくなった

「危なかった……」

「何とかなったな」
「痛えだろ竜崎！」

二人でため息を吐いて安堵していると、横から抗議の声が

「お前がぼけつと突っ立ってんのが悪い。危うく先生に見つかりかけたぞ」

「だからって思い切り突き飛ばすな！10メートル近く転がったじやねえか！」

そういえばそんなこともあったねえ

「いいじゃん、無事なんだし」

「危うく溝にはまりかけたけどな……！」

ご苦労様です

「そんなことより、さっさと探しに行くぞ」

「俺の抗議がそんなことよばわり……！？」

なんかまだぶつぶつ言ってるけどここは無視させてもらおう

「それじゃ、入り口は頼んだぞ」

「おう、任せろ」

二人でそんな会話を交わし、まだ文句が言い足りなさそうな神北をなだめつつ迷路のような地下室の奥へと進むのだった

/ /

えっと、さっきこつち曲がったからこつちだっけ？

……あれ、行き止まり

あっそっか、ここを右に曲がってきたんだっけ

……こつちも行き止まり

っていうか、これって迷ったんじゃね？

とりあえず叫んでみる

「ここはどこだー！ー！！」

ふう、すっきりした

今俺は、実習室の地下室の奥、さながら迷路みたいになっている機械の集まりの中で、世間を騒がしているウイルスの作者を探していた竜崎に頼まれて気軽にOKしちゃったけど、これ結構めんどくさいなにせ探してる場所がホントに迷路みたいだ
どこを見ても、似たような形の機械ばかり
おかげで探し始めてから3分、見事に迷ってしまった

「ここは……さっき通ったな。じゃあこつちも……通ったし」

右に曲がっても左に曲がってもここがどこだかまったく分からない
正真正銘の迷子になってしまった……

ちよつとマメ知識 リターンズ

結弦「さて、また始まってしまったが今日のテーマはなんなんだ？」

仲村「えつと……今日はスパコンについてだつて」

結弦「じゃあ今日は俺が説明してやるか」

仲村「今日は任せるね。私あんまりハードウェアには詳しくないから」

結弦「OK」。それじゃ始めるぞ。スーパーコンピュータ、縮めてスパコンとは処理性能がすごいコンピュータである」

仲村「……つえええ！？まさか今ので終わりじゃないよね！？」

結弦「冗談だよ。それじゃ改めて。スーパーコンピュータってのは、処理性能が普通のパソコンより高速なコンピュータのことだ。最近じゃ理化学研究所と文部科学省が主導して、神戸に設置されている『京』っていうのが世界1位になったつて話題になつてたな」

仲村「それなら私も聞いたことある。去年も事業仕分けで話題になつたんだよね」

結弦「そうだな。世界一速いコンピュータを作るのは人材育成や、天文学みたいな高い処理性能が必要な計算の処理をするためつていうのもあるけど国のプライドもかかつてるからな」

仲村「いろいろ大変なんだね」

結弦「こつやつて国家プロジェクトとして作られる場合のほつが多いんだけど、最近面白い話を聞いたな」

仲村「どんなの？」

結弦「ゲーム機でプレイステーション3、通称PS3つてあるだろ？あれを1700台ちよつとつなげてスパコンを作つたらしい」

仲村「そんなものでもスパコンになるの？」

結弦「まあスーパーコンピュータつてのは処理性能が高いコンピュ

「タの通称だからな。京みたいな国家プロジェクトで作ったものでも、個人がPS3を集めて作ったようなものでも、性能が高かったらスパコンだ」

仲村「ふ〜ん。それで、スパコンと、普通のパソコンとは何か違うところはあるの？」

結弦「大体は一緒だな。普通のパソコンに搭載されてないような最新技術が使われてることはあるけど。ちょっと高性能なパソコンが数千台ケーブルで繋がって同じ計算をしてるってイメージだな」

仲村「それじゃあ、インターネットに繋がってるパソコンが同じ計算を解こうとしてたら、それはもうスパコンってこと？」

結弦「まあ、間違っではないと思うが……もしかして、やろうとしてないか？」

仲村「ううん。まだするつもりはないよ」

結弦「まだって……。まあ、いいや」

仲村「そういえば『京』以外にはどんなスパコンがあるの？」

結弦「俺もよくは知らないけど……JAMSTECってところの地球シミュレーターってスパコンが結構前に世界1位の計算速度を出してたな。結構古いけど」

仲村「そうなの？」

結弦「コンピュータの世界はすごいスピードで進歩してるからな。

今は1位でも数年もしたらすぐに追い抜かれる」

仲村「へ〜。さすが結弦、詳しいね」

結弦「ハードウェアに関してはお前に負ける気はないからな」

仲村「ソフトのことになると私に勝ったことないもんね」

結弦「……。そ、それじゃあ今日はこの辺で」

仲村「またね〜！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0408t/>

The Defense Network

2011年10月15日03時10分発行